て、公卿道と反す。この三道に於いて、公卿道は、既に客位に落つ。主位にあるものは、この後の兩道なり。この兩道は、新と、舊と、所屬の文學を異にせりといへども、猶時を同くし、處を一にして存在せるもの、屢〻錯雜し、混交して、多くの矛盾を現はし、暗鬪を生じ、武士道の義理と、平民道の人情との衝突は、當代の文學、ことに、新文學の好資料となれり。而して、多くは悲慘なる結末を呈し、從來殆んどあらざりし幾多の悲劇を現出せしめたり。當代の文學に、一種凄壯の色あるものは、職としてこれに由り、殆んど他にあらず。

義理と人情と

然れども、更にこれらの道を貫いて、當代唯一の大道となりしものは、すなはち儒道なり。日本道とも云ふべきものを唱道して、これに反抗せしものもありきといへども、猶當時人士の準據し、安心立命せし大道は儒道なり。儒道の興起は、漢學の奬勵に起因す。下尅上を

儒道

制するに急なりし幕府の爲政者は、忠孝主義鼓吹の絶好の道として、これを選擇し、力を盡くして奬勵したり。ことに、學術と云へば、有職、古實と、歌道との外、殆んど何者も存せざりし當時に於いては、最も新しき學問として、漢學は習得せられ、尊崇せられたり。而して、從來他の文學と同じく、僧侶の文學たりしもの、一轉して、士人の學となり、引いて天下の學となり、儒道は、遂に唯一の大道となりしなり。儒道の教育法は、佛法の大部分と同じく、開發的にあらずして、注入的なり。例を引き、事を述べて、自己の教理を說明し、諄々として倦まざるもの、その主義なり。故に、從來の佛法的教訓は、變じて儒道的教訓となり、而して、勸善懲惡の大主義は、一世を風靡せり。故に、當時の諸道は、その立脚地を此處に有せると等しく、當代の文學、また根柢を此に存せり。然れども、その勢の極まるところ、反動的態度の發生を禁ずるこ

と能はず。豪放、濶達、この教訓を冷笑して、大勢に反抗するものも現はれ、淫靡、浮華なるものゝ多くを作り、著しく反道德態度を發揮したり。かくの如きもの、踵を接して出でたりといへども、官憲の抑壓は、勸善懲惡の範圍を脫出せしめず、猶教訓的態度を標榜せしめたり。

道中心の文學

すなはち、佛法を以て中心としたりし文學は、こゝに一變して、儒道を中心とする文學、すなはち人たる道を中心とする文學となりしなり。法中心の文學は、一轉して道中心の文學となりしなり。

古典主義

漢學の興隆に伴ひて勃興したるものは、復古の氣運なり。此の氣運は、遂に、古文學の自由討究の風を促し、從つて、一種の崇古主義、更に云へば、固有道德主義を鼓吹せしめて、儒道に、反對の態度を取らしむるに到れり。文學もまた、これによりて、過去を崇拜し、模倣することを致し、一種の古典主義を起さしめ、一部の擬古的文學の隆盛を促し、

現代主義

すでに云へるが如く、取つて古文學中に交ふとも、時に識別すべからざるものをも生じたり。一種の自覺的態度によるといへども、寧ろ古典の憧憬のみ、愉悅のみ。その以上に出づるもの、殆んど何もあらず。却つて、その思想より發せる勤王主義が、明治維新の大動力となりしを尊むべし。しかれども、これ舊文學のことなり。新文學は、この大勢中に在つて、多大の影響を蒙りつゝも、猶現代主義を守り、盛に生語を驅使して、當面の社會を描き、人物を寫して、眼前に活躍せしめたり。故に、吾人は、これによつて、眞の當代の世界に接し、當代の人間を見るを得るなり。ことに、武力抑壓の下に發生したる粹と云ひ通と云ふ、洗鍊せる情趣を描きて餘蘊なく、對者をして、享樂の匂に浸りて、自失せしむるあり。かくの如きもの、或は研究的なる、崇古的なる大勢に反抗せるに發せるものありといへども、また以て、眞の心的要

自覺的態度

求に因らざるべからず。眞の自覺的態度は、却つてここに存すと云ふべし。

以上の如く、當代の文學は、體裁に於いて、種々なると共に、量に於いて多く、作者に於いて富めること、前代未だ曾てあらざるところなり。然れども、その貫くところは、武士道と、平民道となり。而して更に、これらを蔽へるは儒道なり。これらの混和の度合に於いて、京阪に於ける場合と、江戸に於ける場合と比して、多少の差異を見る。故に、當時代前後三百年、これを土地によつて分てば、京阪、江戸の二となる。

當代の四區劃

更にこれを大勢によつて分てば、前者は二となり、後者はまた二となるべし。すなはち、元祿以前は第一期なり。元祿時代は第二期なり。而して、共に京阪の時代に屬す。安永、天明時代は第三期なり。文化、文政時代は第四期なり。而して、共に江戸の時代に屬す。以下、この區劃によりて、當時の文學推移の大體を窺ふべし。

第一節　韻文

一　內容

第一期

戰國亂離の間幾多の政治的曲折ありしに伴ひ、平民的思想は、漸次興起して、この時代に入れり。然れども、第一期に於いては、顯著なるものあらず。大體に於いては、猶少數の貴族と、僧侶と、隱者との時代にして、眞の平民の時代は未だ來らず。從つて、傳習的氣風盛にして、平民的氣質の、清新、勁拔、特筆すべきもの未だ起らず。たゞ、平民的に、滑稽を愛し、突梯を好み、機智を弄し、利口を重んずる方面は、前代を繼承せる俳諧連歌によつて、著しく表現せられたり。前代の俳諧連歌は、その主とするところ、もとより滑稽に在り。著想、人の意表に出づるにあり。然れども、その趣るところ、甚だしく卑俗に流れ、醜汚に陷り、殆んど、口に上すべからざるものあるに到れり。當時は、實に、これを繼承せりといへども、人心をして、漸く嚴肅の態度を持せしむるに到りし敎化は、既に、甚だしき猥雜を許さず。その滑稽も品位あり、その著想も意義ある者に限り、全體に於いて淺薄、卑近、情味に乏しく、興趣を缺くといへども、猶敎訓的意義ある者を欲したり。故に、輕快、奇拔の度は、漸次減少して、平板、單調の弊次第に起り、いはゆる駄洒落、地口に傾き、眞の意味の滑稽に達せざるもの多きを致せり。ことに、古風の俳諧の主義とするところは、俳諧は、句毎に俳言ある連歌なりといふにあるを以て、其結果として、生語の分量の多きに止まり、意義に於いては、異なる進歩を示さず。たゞ、從來の短歌中の俳諧の一體の、形體を縮少したるに過ぎざるが如き者となり、特に、一新境地を開拓したるものを見ず。その門流に於いて、稍〻變化したる趣致を存せ

前代の繼承

敎化によれる嚴肅の氣分

平板單調

新時代的活氣

るものありといへども、また著しき進歩を呈せず。而して、その間に在りて、當時の學術の煩雜なる形式は、引いてこゝに種々[3]の規律を制定せしめしを以て、これに隨喜せるものにさへ、煩縟の感、嫌厭の情を生せしめたり。

この古風の陳套なる內容と、複雜なる規律とは、新俳諧の興起を促さゞるを得ず。談林派[4]の起れるは、故なきにあらず。談林派は、古風の複雜に對して、簡易なり、陳套に對して新奇なり。滑稽を欲することと、猶古風の如くなりといへども、その云ふところ、縱橫自在にして、如何なる障礙をも蹴破する勢あり。而して、謠曲にても、漢詩にても、古歌にても、其種類の如何なるかを問はず、苟も、人耳に熟するものは、盛に引用し、驅使して、應接に遑あらざらしめむとし、突飛なる思想、奇異なる配合、豪放なる新時代の意氣を發揮して、務めて人の意表に出でむとす。故に、すべてに於いて、活潑々地にして、古風の、沈滯して生動せざるとは、霄壤の差あり。この思ふがまゝに云ひ、感ずるが如くに述べて、從來の典故と、規律とに抵抗せざるところ、確かに、新文學の基礎をなし、根柢をなしたるものと云ふべし。然れども、猶古風と同じく、馱洒落、地口に陷りて出づること能はざるは、更に、一改革の起りて、再び、これを匡正せむことを待てり。

傳習の破壞

第二期

第二期に於いて、初めて、平民的思想に動かされたる者は短歌なり。短歌の、俳諧に後るゝこと猶一歩なるは、俳諧よりも學問的にして、無學者の、卒爾に指を染め難き處ありたればなり。而して、從來、ことに前期に於いて、歌[5]學者が從事したる古文、古歌によりて、開發せられたる學識は、平民をして、すでに、狹隘なる天地に跼蹐せしめず、無意義の傳習を破壞し、舊慣を脫却せしめむとせり。然れども、此覺醒の、俳諧

と歩趨を同じくせず、全然現代的ならずして、愈〻古典的なるは、俳諧の、平民的なるものを模範としたるに反して、專ら貴族的なるものを理想としたればなり。而して、その標準を、平安朝の中期以前、及び奈良朝時代に高め、その假名遣をさへ採用し、以て當時に應用せむとするに到りたりといへども、未だ議論の世なり、破壞の世なり。その作物に於いては、堂上家と多くの差異なく、未だその理想の時代に追隨すること能はず。況んや、新境地を開拓するに於いてをや。

これに、反して、眞に、新氣運に促がされて、異常の發達をなし遂げたるものは俳諧なり。古風の、短歌的の駄洒落、談林一流の放膽的地口を一掃して、幽玄の一思想界を開拓[7]したるは、蕉風の俳諧なり。この派の唱ふる處、曰く寂、曰く細み、曰く句、曰く響。これら、或は、句そのものに現はれたる思想、或は、句と句との間に起る連想を云ふ。故に、從

玄幽の境地

來の奇矯なるもの、洒落なるもの、悉く跡を收めて、寂靜となり眞摯となりたり。連歌は、その起る處、滑稽に在り、突梯に在り。而して、こゝに到りて、初めて、その面目を一變したりしなり。

蕉風に於いて現はされたる幽玄の趣致は、平安朝時代の末期より、鎌倉幕府時代の初期に於いて、既に唱道せられし處、殊に、多とすべきものに非ず。然れども、その當時に於いては、意いたりて筆伴はず、想徒らに馳せて、語これに及ばず。その多くは、語句の緊縮して、思想の複雜せるものを臚列し、全體に於いて、印象を不明にし、たゞ一種の悟得を待てり。或は、その語も、その意も、絢爛を主とし、艶詞、麗語によりて、その目的に達せむとしたり。すなはち、複雜と、絢爛とよりして、幽玄に入らむとせしなり。これ、到底なし得べからざること、その大半の、失敗に終りしは自然に屬す。然るに、鎌倉幕府時代及び以後に於

鎌倉幕府時代の失敗

宗教的趣味の發揮

いて、新佛教とともに、禪は流行せり。所謂禪味は、繪畫、建築、その他に於いて、著しく現はれたり。然れども、文學的に發現せられたるもの、未だ多からず。短歌は、前時代を踏襲せるのみにして、當初の目的に達したるものあらず。散文は、たゞ、佛教の教理を、平易に說かむとせしのみ、この以上に出づるものあらず。然るに、新俳諧は、古風及び談林の洒落に飽きて、基礎を禪的悟了に置き、俗間卑近の事實により、俗言、平語を用ゐて、直ちに、自然と一致し、瞑合して、眞の幽玄の境に入れり。これによりて、俳諧連歌は、初めて、眞の文學的價値を生じたると共に、また短歌によつて希求せられたるところのものを、獲得したり。流行の期間頗る長く、しかも、十分の表現を得ざりし宗教的趣味は、また、こゝに確實に發揮せられたり。韻文の神髓を得、宗教の眞趣を得、これ一種の新しき統一なり。新俳諧の價値ある所以は、主としてこ

新しき統一

時代思想の自由なる發露

ここに存せり。然れども、要するに幽玄なり、枯淡なり、當時の發展的にして、豪放、濶達を以て生命とせる江戸の如き地に、流行すべくもあらず。故に、須臾にして、その流風の廻旋するとともに、この地に於ける一派は、驚くべく變化せり。

俳諧の大成を說けば、又淨瑠璃の發達を述べざるべからず。俳諧は、韻文としては、形式短少に過ぎ、且つ、一種の限られたる趣味を寫すを主としたるを以て、當時の大多數の思想は、完全に現出せられたるにあらず。これに反して、淨瑠璃は、語句も多く、形體も長きを以て、時代思想は、こゝに、自由なる發露を得たり。抑〻當時、幕府の儒道奬勵以來、年序を經ること殆んど百年、儒道的精神は、十分に浸潤して、如何なる社會的事象も、皆儒道的義理によつて裁斷せられむとす。故に、純然たる儒道中心、平安朝時代の感情中心とは、全く趣を異にせり。こ

の思想の、遺憾なく發揮せられたるは、實に當時の淨瑠璃なり。三味線の渡來は、淨瑠璃發達の楔子をなせり。幾多の古淨瑠璃を經て、この時期に到りて出でたる新淨瑠璃[8]は、その初に於いて、これらの古淨瑠璃、及び謠曲、御伽草子、其他を材とし、また、その以外の歴史的資料を本として、作り出せる者にして、時代物、すなはち、歴史劇なり。而して、當時の喝采は、皆これに集まりしなり。然れども、その眞價値は、むしろ稍〻後に到りて作られたる世話物、すなはち社會劇に存することは勿論なり。既に、謠曲に、現代的事實をうつすものありしを說けり、世話物の模範は、蓋しこれに在り。

歴史劇

社會劇

今、この時代物すなはち歴史劇と、世話物すなはち社會劇との兩者を檢するに、その間に、大いなる溝渠の横たはるを見る。時代物に於いては、主として、善と、惡との鬪爭を寫す。而して、幾多の亂戰、苦鬪の

善と惡との戰鬪

末、遂に、善の、全く惡を征服するを描く。元來、善は必ずしも惡に勝つこと能はず、ことに、これらの寫せる惡は、暴戾、恣睢、殆んど敵すべからざる優勢のものなるを以て、尋常一樣の手段によりては、到底、善の勝利に歸すべくもあらず。殊に、その善は、比較的纖弱にして、多くは、孤立無援なるに於いてをや。然るを、これらの新淨瑠璃に於いては、必ず、この弱き善をして、强き惡に勝たしめむとす。故に、こゝに大いなる不自然は生じ、今日よりみれば、甚だ牽强にして、嫌厭に堪へざるものあり。然れども、不德は德に勝たざるを以て理想とする儒道的思想は、これによりて十分に表現せられて、殆んど、遺憾なきを見るなり。忠臣或は孝子の、姦臣或は狡兒を壓服して、相率ゐて順境に入り、人世の和樂を得るを見るは、當時の人、主として低級なる看客の、特に快哉を呼びしところなりしなり。猶考ふるに、これらは、等しく歴史的名

時代觀念の缺乏

稱を冠せりといへども、その實は、當時の事象なり。時代の考慮は、嚴密に作者に存せず、古英雄と云ひ、古武士と云ふ、皆名を借り、體を假れるのみ。その云ふところ、思ふ處、悉く當時の人その儘ならざるはなし。畢竟、その皮を古にし、而して、骨を今にするものなり。故に、名は時代物なりといへども、その實は世話物なり。英雄、豪傑等、すべて、常人に超えたるものを主人公としたる世話物なり、簡單なる儒道主義を寫したる世話物たるに止まれり。

義理と人情との衝突

更に轉じて、世話物の方面を見るに、是等は、前者と異なりて、其描く處は、義理と、人情との衝突なり。而して、人情は破れ、義理は勝つ。其結果として、人情を重しとし、義理を輕しとしたる幾多の男女は、劣敗者となりて、死の深淵に陷るなり。これ甚だしき悲慘事なるを以て、作者も、圓滿なる解決を望みて、最後の悲劇に到達せしめず、中途に於

情中心時代との相違

いて、これを救濟せむと企てたりといへども、多くは、覆車の勢、また制する事能はず、遂に、死にまで到達せしめたり。これを、平安朝時代に於いて見れば、勝利は、勿論情にあり、義理にあらず、もし、情の勝利とならざるときは、その劣敗者は、たゞ、山寺に隱るゝが如くにして終るべし。當時は、すでに、かく餘裕あり、緩徐なるを許さず、必ず死に到らしめざれば止まず。故に、簡單なる善惡の鬪爭よりも、この鬪爭は、一層酸鼻すべき事實を產出す。ことに、その敵と、味方との兩者に、同情を生じたる看客の心は、動くこと愈〻多く、これに加ふるに、當時の名手が、これを謠ひ、且つ語りしを以て、その流傳するところ、隨喜者の多くを生じ、幾多の心中者を出したりとさへ云はる。

然り而して、この世話物の主人公は、市井の匹夫、匹婦なり。學もなく、才もなく、たゞ、市井間に成長し、生活に奔走する尋常一樣の人間な

個人の價値

り、時代物の主人公たる古英雄、古豪傑の一走卒に價せず。然れども、その心中の苦悶、情を守りて義と闘ふ苦悶は、一種の大戰爭なり。決して、英雄、豪傑の、堅陣に向ひ、强敵に逢ふと異なることあらず。その大破裂は、勇ましき討死なり、哀なる最期なり。故に、世話物の主人公も、また一種の英雄なり、豪傑なり。畢竟するに、個人の價値は、實にこの時にありて、よく發揮せられたるなり。これ、蕉風の俳諧の、町人、百姓のことをも咏せしと趣を一にし、共に、平民の位地を向上せしめたるものなり。然れども、これら皆、低級者の娯樂のみ、張三、李四の翫弄物のみ。その世話物の如きも、市井の事實を、急遽に場に上したるに價値ありしなり。故に、兩者ともに、趣向の奇、脚色の妙をのみ希ひし、かも、大いなる不自然に陷るに到りて、世の同情を失ひ、漸次衰頽せるは自然なり。恰も、平安朝末期の物語の、趣向に墮して、遂に衰運を招きしと、その轍を一にせり。

第三期

以上云ふところ、主として、京阪地方の色を帶びたる思想なり。江戸に到りては、少しく異なるものなかるべからず。江戸の思想の、漸次文學の基礎となれるは、第三期以後の事に屬す。この時に到れば、江戸幕府の基礎は、全く確立して、微動だもなすべからず。百貨は輻湊し、民衆は雲集し、土地は般賑となりて、一般市民は、餘裕を生じたるを以て、文藝の要求從つて起り、京阪特有の文學は、相率ゐて、東遷するに及べり。而して、この時期に於いて、はじめて、他と歩調を齊しくしたるものは、短歌なり。然れども、これ全く、當時の復古の風に煽られて、こゝに到りしのみ、當時の思想を、そのまゝに體現したるものにあらず、時代と殆んど風馬牛なるものなり。勿論、當時の國學者の理想は、儒佛の爲めに、虛僞に陷りたる從來の思想を廓清して、清淨無垢な

復古の氣運の熾盛

理論よりも趣味の時代

る純日本思想に還さむとする、一種の宗教といふべきものなりといへども、理論よりも趣味に偏せる時代なり、その行はるゝところは、ただ短歌のみ、而して、文章のみ。故に、その作れるところを以て、これを、古書の中に交ふとも、甄別しがたきものありといへども、遂に糟粕なり、模倣なり。決して、一新境地を開拓したるものにあらず。たゞ、復古の氣運の、遡つてここに到り、かくの如きものを出せるを示せるのみ。

俳諧に於いて、新俳諧の流行は、猶盛なりといへども、又往時のものにあらず。放縱自在、豪放、濶達なる江戸氣質は、こゝに發露を求めて、

江戸氣質の發揮

從來の幽玄、枯淡を抑壓したるを以て、江戸座[10]の風は、一世を籠蓋せり。これに次ぎたる諸派は、交ふるに滑稽を以てし、洒落を以てし、愈〻放縱に、愈〻奇矯に、殆んど謎語の如きを致し、無意義なること、淺薄なること益〻甚だし。然れども、漸次、自然を離れて人事に著目し、人事美を謳歌すべく轉移せり。

江戸氣質の才氣縱横、放奔自在なるところは、殆んど、これと時を同じうして、狂歌によりて現はされたり。いはゆる天明[11]調の狂歌は、これなり。然れども、その云ふところ、古歌の範圍、誹諧歌の範圍を出でず。たゞ、意を斬新にし、調を輕快にしたるに止まり、特に、新境地を發見したるにあらず、事に觸れ、物に遭ひて、凝滯せず、躊躇せず、直ちに、章をなすに妙ありしのみ。この古歌の範圍を脱し得ざるは、また短歌と同じく、復古の氣運の然らしめしところなり。

かくの如くにして、その流風、遂に、人心を滿たすに足らざるを以て、一種の改革は、俳諧に初まり、天明調は生じたり。その主なるものは、或は、豪快にして機警を兼ね、或は、平淡にして雅趣に富み、而して、印象

の明瞭にして、聲調の爽快なるところ、蕉風の幽玄を愛し、枯淡を希ひしと頗る逕庭あり。更に、自然を觀察して、忠實に描寫せむとし、嚴に客觀的態度を持せるところ、蕉風の、自然と一致、瞑合せむとし、常に主觀的態度を離れざりしと、また甚だ差異あり。これに加ふるに、學問的趣味と、歴史的趣味とを、巧みに配合せしめ、一種の新古典趣味を發せしめたるところ、蕉風の卑近の事項、俗間の事實を主とし、平民的趣味を宗としたると、また異色あり。而して、この最後のものは、復古的氣運の、年と共に熾烈となりしを證せずんばあらず。

客觀的態度

主觀的態度

かく、俳諧の客觀的に偏せるを補ひて、主觀的態度を取り、專ら人事を歌へるものは川柳なり。簡勁の語、直截の句、これによつて、吾人は、事物の裏面を觀察して、嘲罵し、諷刺し、詆笑するを以て快事とせる江戸氣質の一面の、潑剌として眼前に躍るを覺ゆ。然れども、これらの

間に於いて、歴史を離れず、古事、古典を用ゐるものあるは、また復古の氣運の熾盛なるを示せり。

技巧的傾向

淨瑠璃は、漸次趨向に腐心するに到りて、全體としては、調和を失し、統一を缺き、支離、滅裂に陷りたり。故に、舞臺面は、常に變化して、俗衆の目を喜ばしむるものありといへども、文學上の價値は既に去り、いはゆる夢幻劇は、愈〻その弊を多くして、衰亡の境に入れり。しかして、京阪の勢力は、江戸に遷りて、江戸の淨瑠璃は、聲價を高めたりといへども、時代は、操の衰微と共に淨瑠璃に黨せず、却つて、脚本の發達を促せり。故に、脚本は、これが爲めに、勢を一時に得たり。然れども、これまた、重きを結構に置きたるを以て、明快を趣味としたる江戸人士には、餘りに複雜にして、理解し難きものも生せり。故に、この時期は、文學の東遷したると共に、すべてに於いて、古典的趣味を帶び、また著

しく技巧的傾向を有し來れり。この風は、猶次の時期にも及べり。

東遷したる文學の、江戸氣質の下に、直に發達し、進歩したるは、第四期に屬す。然れども、この發達と、進歩とは、事專ら散文に關し、韻文の興るところ少なきは、注意すべしとなす。蓋し、散文より一時期早く發達したる韻文は、第二期に於いて發達し盡くしたりしなり。故に、その以後は、たゞ、大體に於いてその後を逐ひしのみ。その流布、弘通の度の、時と共に增加したりしのみ。

第四期

韻文の衰頽

第三期に於いて、國學者の主として唱へしところは、古意にあり、古道にあり。理論を好まず、趣味を好み、ことに優婉にして、瀟洒なる趣味を愛せし門下は、殆んど、古意、古道を唱道せずして、趣味の一面をのみ鼓吹し、風月の諷咏を以て能事とせり。しかも、猶その準據し、崇拜するところは、奈良、平安朝の間に在り。當時の好尙を持して、古代を憧憬するは、明らかに一種の矛盾なり。故に、こゝに、新傾向の、この矛盾を調節せむとするものを生せり。その說くところ、徒らに古意を襲ふは、和歌の極致にあらず。自己を主とし、自己の性情の趣くところに隨ひて歌ふべしと云ふにあり。これ、著實なる論議なり、正當なる見解なり。然れども、未だ、現代思想を歌ひ、現代的聲調を主張するに到らず。

現代主義と崇古主義との調節

狂歌の流行は依然たり。分岐して、一は、俗意を盛に用ゐて、古の落首の流に倣はむとし、一は、古意に反りて、誹諧歌を襲はむとしたり。これ共に、復古の氣運に催されたるは云ふを俟たず。而して、流行は流行を生じたりといへども、見るに足るべきもの少なし。俳諧も、天明の改新も、こゝに及んでは、その遺響を傳ふるに過ぎず。末期に到つては、全く詩趣を失し、明治時代に入りて、根本的に革新せらるゝまで、

では、殆んど云ふに足らず。川柳も、また才氣なく、卑俗なる穿ちのみ、となれり。たゞ、これらに於いて、江戸氣質の一面なる、才氣を弄して、誹刺を事とし、滑稽を好んで卑俗を避けざるを表白せるは見るべし。淨瑠璃は全く起らず、脚本のみは相次げり。而して、脚色の變じて極まりなきところ、殘忍も、滑稽も、眞面目も、交〻出でゝ、應接に遑なからしめ、その間に、江戸趣味の潑剌たるものを示すこと、猶他の文學と等しきは、歎賞に値すべし。然れども、その全體に於いて、文學的價値ありとは云ふべからず。

江戸趣味の巧みなる發揮

此の如く、當時は、散文の時代にして、既に、韻文の時代にあらず。故に、化政時代を說くものは、殆んど、專ら散文を說きて、韻文に及ばず。畢竟、韻文は、その盛を第二期に極め、その行かむとするところに達したるによれり。然れども、江戸趣味の發揮は、こゝに極まり、京阪の文學は、全く江戸の文學となり了れり。

(1) 松永貞德の一派
(2) 松江重頼等
(3) 御傘等
(4) 西山宗因の一派
(5) 北村季吟等
(6) 契沖、下河邊長流
(7) 松尾芭蕉の一派
(8) 近松門左衛門等の諸作
(9) 賀茂眞淵等
(10) 寶井其角等の諸作
(11) 太田南畝等の諸作
(12) 谷口蕪村等の諸作
(13) 竹田出雲、並木宗輔、近松半二等の諸作
(14) 並木正三、同五瓶等の諸作

(15) 小澤蘆庵、香川景樹の一派
(16) 宿屋飯盛
(17) 鹿都部眞顏
(18) 窪屋南北等の諸作

二　形式

第一期
忠實の繼承

第一期の短歌は、前代を繼承せるのみにして、內容的價値の乏しきと共に、形式的價値に於いても、多くを價せず。たゞ、前代の形式を、忠實に繼承せりと云ふに留まれり。俳諧は、稍〻これに反す。すなはち、前代の俳諧連歌の、緣語、懸詞等を用ゐて、滑稽の意を述べしと趣を一にせりといへども、その意義に於けると等しく、語句に於いても、甚だしく猥雜、卑陋なるものを避けむとせり。而して、また前にも述べたる、俳諧は句ごとに俳言あるべし、と云ふよりして、俳言だにあらば、

放膽的用語

必ずしも、滑稽の意を要せずとせり。これ、從來主として短歌に用ゐ來れるものゝみを、雅馴の語とし、その以外の語、いはゆる俳言は、擧つて滑稽なりと信じたるより起れり。故に、その云ふところ、唯、語の上の滑稽と、卑俗とのみありて、他に存するものなく、從つて、形式に於いては、遂に刮目すべきものを見ず。古風に次ぎたる談林[2]の一派は、大體に於いて、前者と同一の範圍に在りといへども、語句の奔放なる使用は、從來の萎靡、沈滯を破れり。ことに、謠曲にても、俗謠にても、漢詩にても、短歌にても、知るに任せ、在るに任せて、隨意に驅使して、才氣と、覇氣とを紙上に漲らせて、讀者を眩惑せしめたるを以て、形に於いて異體を出し、調に於いて怪奇に陷れりといへども、躍動の勢は、こゝに生じ、清新の氣は、これより湧けり。然れども、その主とする修飾は、猶、緣語なり、懸詞なり。未だ、短歌の範圍を脫し得たるものあらず。

第二期

第二期に入るも、短歌は、依然として前期の如し。たゞ、その內容に於いて、平民的意氣の勃興を示して、自由研究の發展を語るものあると共に、その形體に於いて、時々鎌倉幕府時代以上に出づるものを生じたるのみ。

これに反して、當時の異常の發展は、形體[4]に於いても、また俳諧に在り。古風、談林の、語句に於ける滑稽は、こゝに跡を斷ちて、生語は、初めて、眞の意味に於いて使用せられたり。而して、それらを連接して、云ふところ、表面極めて平易にして、殆んど、一の散文の形體をなし、何等の奇なしといへども、自然の美、宇宙の眞は、その背後にあり。讀者の連想につれて、次第に擴張し、展開す。故に、從來の修辭的技巧を主とするものよりみれば、これらの俳諧は、或は大いなる價値なかるべし。然れども、かくの如くして、猶偉大なるものを連想せしむるは、寧ろ猶

生語の眞の使用

優秀なる技巧にあらずや。その意の上より云ふべき寂、細み、響、句の幽趣、微韻も、亦この生語の連續の間に現はれ、從來の短歌者流の求めて得ざりしものを、更に、この方面よりして探り得たり。生語の權威は、實に、よく發揮せられたりと云ふべし。これまた、平民の勢力の發展にあらずして何ぞや。

形體の縮少

從來の形式の脫出は、また、淨瑠璃[5]に於いて見るべし。まづ、その組織に於いて、古淨瑠璃の十二段、又これに次ぎたる六段を變じて、大抵、時代物すなはち歷史劇五段、世話物すなはち社會劇三段と定めたるは、その主なるものなり。文章に關して、古淨瑠璃の、大抵、散文素に富み、韻文素に乏しかりしを轉じて、殆んど、完全なる韻文となせるは、それに次ぎたるものなり。殊に、この後者に於いて、古軍記物語その他に於けるが同じく、今樣より出でたる道行文を挿入して、聲調の妙、盤

韻文素の多量

上玉を轉ずるが如くならしむるところ、云ふべからざるものあり。しかのみならず、それによりて、旅中山水の變化と、主人公の心的推移とを、錯雜、混合して、一種の統一の美を發揮せしめたるは、巧手ならずんば能はざるところなり。然れども、これらの作物に現はれたる作者の才は、餘りに奔放に、餘りに自在なり。故に、筆は、屢〻岐路に入りて出でず。無用の滑稽、卑猥の語句、全體と殆んど何の關係なく、却つて、作者の態度の、眞摯なるか否かを疑はしむるもの、甚だ多し。更に、世話物すなはち社會劇は措く、時代物すなはち歴史劇に於いては、時代の觀念甚だ薄し。周圍の山野の景致より初め、殿堂、服飾、器玩の類に到るまで、殆んど當時のものなり。當時に現在せるものを、少しく變化せるに過ぎず。ことに、作中の主人公なる英雄、豪傑の云ふところ、行ふところ、根柢に於いては、全く當時人の言動なり。たゞすこしく、古代の色彩を施せるに止まれり。大體に於いては、悉く當時なり。

時代觀念の缺乏

當時を超越して、その目的とせる時代に到達すること能はず。これ皆、作者の、古代の研究、古書の智識の足らざるが致すところなるべしといへども、當時の一般人士は、かくの如くならずしては、了解することと能はざりしなるべし。故に、作者の不學、不穿鑿は、却つて、意外の賞讃を博したりしならむ。轉じてまた、これらの語句に就いて見るに、句と、句と、語と、語との連續は、多く懸詞、緣語にて成立す、しかも、これを用ゐること甚だ多し。故事、出典も、事件に重要の意味を付せむが爲めに、引用すること、また甚だ多し。作者の才藻は、こゝに認めらるべしといへども、讀過一番、頗雜の感に堪へざるものあり。これ亦、舊來の短歌の修飾以外に出でざるもの、俳諧の、短歌以外に出でしと趣を異にせり。然れども、長き韻文としては、絶對に新しき修飾法の生せ

懸詞、緣語の續出

ざる限りは、止むを得ざるところなるべく、しかも、却つて聽者の賞讃は、こゝに在りしなるべし。

かく、この時期の韻文は、內容に於いて進歩せると共に、形式に於いても、また進歩したり。多くの缺陷は存せりといへども、後の俳諧も、淨瑠璃も、共にこの以外に出づること能はず。百年の典型は、この時に定められしなり。而して、當時代の韻文の隆昌は、この時に限られたり。

典型の制定

第三期

以上述べ來りたるところは、いはゆる京阪の文學の形式なり。これの東遷して、眞の江戸文學となるに到つては、少しく異なるところなかるべからず。第三期以後は、すなはち、これを說明せるものなり。第二期に次ぎたる短歌の復古は、その內容に於いてのみならず、その形式にも及べるは、論なし。國學[6]者の古道發揮の精神は、引いて、その歌文にも及びて、奈良朝、及びその以前のものを以て、理想的作物と思惟するもの多く、從つて、形式もまた、專らこれに準據したり。故に、短歌のみならず、長歌も勃興して、句格と、聲調と、直ちに奈良朝を繼續せり。而して、ことに、形式の簡單にして、模擬に容易なる短歌は、樸素、簡勁、古歌と識別し難きものあり。然れども、あまりに蒼古にして、またあまりに怪奇なる死語を復活せしめたるを以て、ある一局部の外、聽くもの少なく、解するもの稀なり。故に、漸次その目標を下して、平安朝を模倣する傾を生じ、その門流の主なるもの、全くこれに據ることとなり、しかも、江戸趣味の影響するところ、次第に、優婉、瀟洒の趣を加へ來れり。

古調の模倣

短歌の、一意古歌の形式を遵奉せしと同じく、狂歌[7]もまた、その範圍を出づること能はず。生語を用ゐ、俗諺を用ゐるに於いてのみ、短歌

引喩より來る滑稽

と異なれりといへども、その大體に於いては、短歌の形式を蹈襲して、殆んど、變改するところあらず。ことに、その得意とせる、古歌の聲調を模し、形體を擬する等は、鎌倉幕府時代初期の引喩、すなはち本歌取に同じ。たゞ、滑稽を主として、放縱自在なるところ、これの、彼れと異なるところなり。而して、また、よくかくの如くなるは、復古の氣運に煽られたるものなり。この間に於いて、緣語、懸詞を、生語によりて、縱横使用すること、手足の如くなるは、才華の爛漫たるを思はしめて、驚嘆に値すべきものあり。これ、都會太平の氣の蘊釀せる、遊戯的氣質の發露に外ならず。

狂歌と同じく放縱自在にして、豪爽、濶達なるは、[8]當時の俳諧なれば、その語句も、また人の意表に出づるもの多し。然れども、その勢の趣くところ、既に云へる謎語の如き者を產せるを以て、たゞ、表面のみに

平安朝的語句

就いては、了解し難きものとなれり。これを改革すべく現はれたる[9]新俳諧は、內容的に、印象の明瞭なるとともに、形式的にも、また明瞭なり。ことに、主として客觀的なるを以て、主觀的なるものに比して、容易に、その眞趣を捕捉することを得。而して、その用語は、平安朝的なるもの多く、品位あり、雅味あり、唱讀一過、直ちに繪卷物的詩趣を泛べしむ。これまた、復古の氣運の波及せる結果に外ならず。これを外にして、當時の小說的語句を用ゐて、その豐富なる連想を利用し、一種清新の味を加へたるものあり、また、儒道の流布とともに盛となれる漢詩の語句の、莊重、典雅なるものを入れて、その聲調によつて、讀者を威壓し去らむとするものあり。姿態は種々なれども、要するに古典的にして、殆んど現代的ならず。又、その句法としては、主として完全、または不完全なる二文よりなる、すなはち、云ふところの配合は、こゝ

配合

現代語

に生ず。兩者の交錯して、しかも調和あるところ、趣味の存するところなり。かくの如きもの、既に短歌にも存せしが、發達せず、第二期を經て、こゝに到りて、大成したりしなり。

川柳は、小人事詩として見るべきもの、俳諧の古典的なるに反して、その語は、すべて現代的なり、古に遡るを許さず。而して、簡明、潔淨、改革以前の俳諧の影響するところ、語句、謎の如きもの多しといへども、了解せらるれば、放笑を禁ずること能はず。故に、これのみは、當時の諸種の韻文と稍〻趣を異にせり。然れども、古事、古語を混用せるものあるは、猶當時の復古の風を脱却せざる者たるを證す。淨瑠璃は、すでに衰へて云ふに足らず。これ、前期に、その隆盛を極めたるによれり。たゞ、俳諧の、これと同樣の事情ありといへども、かく勃興せる所以は、他に、これを壓迫すべき何物も無ければなり。然り而して、脚[10]

古典的傾向の熾盛

本は、重きを趣向に置き、對話に置き、文章に置かざりしを以て、生語を主としたりし外に、こゝに云ふべきものを見ず。

この時期は、すべてに於いて古典的なり。復古の氣風の煽るところ、悉く古典の句なくんば止まざらしめむとせり。他と比して發達の後れたる短歌は、よくこの氣風に投合せり。俳諧の如き平民的傾向あるものも、またこれに沒頭せり。この氣風の熾烈は、次の時期に於いて、反動の勢を生じて、その衰運を招かしめたり。

第四期

隆盛後の韻文

散文の隆盛なる時代の韻文は憐れむべし。第四期に於いて、短歌のみは、發展の後流行せしが故に、こゝに、猶生氣あり。前に主張せられし古意、古調の、こゝには、すでに平安朝第二期以下に墮ちたるを以て、佶屈なりしものは流暢となり、聱牙なりしものは雅馴となれり。然れども、その用ゐるところ、多くは死語に留まり、古歌の範圍を脱出

内容と形式との聲調の一致

すること能はず。故に、こゝに、一種の非古典主義は生じたり。すはなち、俗言、平語、猶歌に詠むべし、これ眞の古意なりと云ふなり。この流風は轉じて、語は、意の趣くところに從て用ゆべし、[13]その語の調子は、卽ち心の調子なるべしと云ふ一派を生じて、改新の聲大いに擧れり。この內容と、形式と、聲律に於いて一致すべしと云ふは、實に、進歩せる意見なり。古來、殆んど嘗て、道破せざりしところ、こゝにはじめてこれを聞く。論者の眼、一世に卓絕せりと云ふべし。かくの如きは、前期の、古典主義の反動に外ならず、然れども、全體は、生語によるべし、口語なるべし、これ人間自然の聲なり、と云ふには到らざりき。ことに、その論者は、その云ふところを行ふ能はず、却つて、從來の歌と、多くの逕庭なくして了れり。

古代研究の馳するところ、狂歌も、古の俳諧歌の流なるべしとして、古語をも用ゐて、氣品を高くせむとする古典的流派を出したれども、[14]現代的傾向の生じたる當時に在つては、その反響は大いならず、從來の如くにして、遂に衰運に及べり。俳諧も、川柳も、隆運は前期に在り、この時代には、既に過去に屬せり。故に、殆んど見るべきものなし。脚本も、また多くを云ふ要なし。たゞ、散文に壓倒せられたる韻文の、最憐れむべきを見るのみ。

すべてに於いて、當代の韻文は、思想に於いて、形式に於いて、第二期に極まれり。その以後に在つては、種々の轉換を見たりといへども、畢竟、その餘勢のみ、餘波のみ。特に、推賞、嘆美すべきものなくして了れるなり。これ全く、平安朝時代の韻文の、第二期と、その以後とに於ける關係と、趣を一にせりと云ふべし。

(1) 松永貞德等

(2)西山宗因等
(3)契沖、下河邊長流等の諸作
(4)松尾芭蕉の諸作
(5)近松門左衛門等の諸作
(6)賀茂眞淵等
(7)太田南畝等の諸作
(8)寶井其角等の諸作
(9)谷口蕪村等の諸作
(10)並木正三、同五瓶等の諸作
(11)加藤千蔭、村田春海等の諸作
(12)小澤芦庵
(13)香川景樹
(14)鹿都部眞顏

第二節　散文

一　內容

第一期

この時代の初期に於いて、發達し初めたるものは、既に述べたる韻文にして、殊に、大成の第一歩を進めたるものは、俳諧なり。散文は、それに反して、未だ注目すべき作物を出ださず。漸く、前時代を承けたる佛法の講話の如きもの、また當時、幕府の奬勵の影響を蒙りたる儒道書類の飜譯めきたるものあり。更にまた、御伽草子の風を襲ひて、淺薄なる戀愛を述べ、或は、神佛の靈驗を說くものあり。すべてに於いて、いはゆる假名草子[1]は、俳諧に比しては、頗る幼稚にして、多くの文學的價値を示さず。從來の傳習を脫すること幾何もあらず。

傳習的

第二期

この遲々たる散文の進歩に、多大の援助をなし、理想の境地に到達

享樂的趣味

せしめたるものは、俳諧なり。すなはち、俳諧は、自己自ら發達して、大いに平民的氣風を發揚せしのみにあらず。更に、散文をも誘導し、啓發して、その大成を促したりしなり。當時、元和假武以來、年序を經ること殆んど百年、京阪の般賑、駭目すべきものあり。ことに、經濟的事情の、平民に利あるもの多かりしを以て、平民の氣焔はこゝに揚りて、その唯一の歡樂境たる遊里は、異常の繁華を來し、青春血の熱せるもの、或は、奇利を市場に博せるものは、爭うてこゝに趨き、千金を拋却して猶足らずとせり。この新しき享樂と、豪奢とは、平民の欲求するところ、理想とせるところなり。故に、假名草子は廢れて、浮世草子は出で、この情趣を曲盡せむとせり。而して、その作者は、俳諧者流にして、しかも平民たり。故に、從來嘗て存在せざりし遊里文學は、始めて發生し、俳諧に基礎を置きたる、簡勁にして洒落、しかも、含蓄深き新散文は、世の歡迎するところとなれり。

寫實的傾向

この新散文は、その要とするところ、たゞ、處々の遊里の寫生なり。故に、一貫せる趣向なく、結構なし。人物の性格も朦朧にして、矛盾あり、扞格あり。然れども、巧みに要處を穿ち、肯綮を捕へたるによりて、的確なる寫生、忠實なる寫實は成立し、華麗にして淫蕩なる時代の世相は、歴々として眼に在り。當時、これと殆んど同時に現はれたる淨瑠璃には、一貫せる理想あり。儒道的道德の、無限の力を有せるよりして、義理は優勝者となり、人情は劣敗者となれるを示したり。しかるに、これらの浮世草子には、かゝる理想なく、たゞ、巧妙なる寫生あるのみ、寫實あるのみ、この以外に存するもの、殆んど何物もあらず。然れども、更に觀察すれば、往々寫生、寫實の間に、作者の加へたる、簡單にして犀利なる批評の、儒道の道德觀にあらず、また佛法の因果律にも

あらず、爾來平民間に鬱勃せる、細節に拘泥せず、豪爽にして自由なる意氣を示したるものあり。世は太平を極めたりといへども、戰國以來の武强的氣象の、銷磨し盡くさゞるものあり、狹隘なる道德に反抗し、冷笑する態度は、猶多數平民の間に存せしなり。此の意氣は、既に俳諧に現はれ、談林の放縱、豪壯となれり。浮世草子の作者は、これより出でたるを以て、その持するところ、また、この反道德的態度ならざるべからず。故に、すでに云へるが如く、吾人は、こゝに、二派の思潮の流を見る。すなはち、一は儒道的、道德的態度にして、他は反道德的態度これなり。この最初のものは、韻文に於いては、殆んど第二期を頂點とせりといへども、散文に到つては、第三、四期に盛に、ことに、第四期に到つて、その勢を極め、勸善懲惡の大旆は高く飜りて、明治の初年にも及べり。これに反して、反道德的態度は、韻文に入らず、散文に於い

二樣の態度

て相次ぎ、第三期を經て、第四期に入り、官憲の抑壓に逢へりといへども、その盛を致せり。

興味中心

浮世草子は、いはゆる八文字屋本となり、單なる、斷片的なる寫生より一轉して、構造の妙、脚色の巧みを主とし、興味を以て中心とするに到りて、鋭利なる觀察は、漸次跡を收めたり。その氣質物の如き、世間人情の機微を穿ちて、今日猶、賞讃するに足るといへども、平板を免れず。文運は、漸く京阪を去りて、次第に東遷し、次期に到りて、江戸に於ける發達を促せり。

第三期

かく、文運は、京阪を離れたれども、歴史の存するところ、未だ全く去らず、殘燈の再び明らかなるが如く、第三期に到りて、こゝに、一種の飜案小説を生じたり。いはゆる讀本は、すなはちこれなり。而して、次の時期の江戸に於ける隆盛の因をなせり。

細緻の寫生

江戸に於いて、先づ發達したる臭草紙、すなはち赤本、黑本、黄表紙の類は、童幼の目を喜ばすに過ぎず、文學としては、殆んど何等の價値をも有せざりしかど、世は愈〻太平にして、人は益〻餘裕あれば、倏忽の間に發達して、大人の讀み、又見るものとなれり。唯、その寫すところは、道義、理義にあらずして、多くは、遊里の情景、神社、佛閣の開帳、祭禮、または流行の見世物等、當時の主なる市井の雜事なり。その間に、簡單なる洒落、または諷刺を寓し、輕妙なる江戸趣味を發せるのみ。故に、これのみを以て、一般の滿足は得らるべきにあらず。遊里の事實の詳記を主としたる洒落本の興起は、すなはちこゝに因せり。これ、第二期に於ける浮世草子と酷似せりといへども、彼れの、的確に要處を寫生せると、これの、精密に、細緻に、殆んど何等の省略をも加へずして、全體を描出せると、彼れの、平民的氣焔を擧げて、鋭利なる批評を施したると、これの、多くの洒落、滑稽を挿入して、讀者の放笑を購はむとせると、全然その趣を異にせり。ことに、その間に、粹と云ひ、通といふ、一種の洗煉したる情趣を表現して餘蘊なきところ、確かに、江戸文學たる烙印を有せり。

江戸氣質の發現

かくの如く、遊里文學は、新たに江戸に發生して、漸次その盛を示したるが、これら、いづれも平民の事にして、反道德態度を有せるものなり。平民以上に行はれたる儒道的精神は、別に、適當なる發現をなさざるを得ず。すなはち、京阪に起りたる讀本の一體は、この要求に應じて、次第に、江戸に發生し、次期に於いて、その隆盛の頂點に上る前提をなせり。

儒道的精神の發現

第四期

韻文の最盛期の、第二期にありしに反して、散文の最盛期は、第四期にあり。當時は、風枝を鳴らさず、海波を揚げず、四民の遊樂こゝに極

まりしが、流弊は次第に百出し、淫猥の風、華靡の俗、その際涯を知らざりしを以て、諸種の箝束は行はれ、法令は發せられ、改革は生じたり。ことに、外國船の、時に隙を窺ふありて、その末期に於いては、暗雲の横たはるあり。然れども、その初期及び中期にありては、いはゆる化政の文藝、就中散文は、この享樂的氣分を載せて、鬱然として興起したり。而して、幕府の施政の方針は、消極的にして、文學、また道義を離るゝを許さざりしを以て、儒道主義を標榜するもの相次ぎ、その最も婬猥なる種類も、表面は、儒道的意義を有する教訓の字を掲ぐるに到れり。故に、勸善懲惡主義は、こゝに、作家の理想となり、これを表現するに、最も適當なる讀本は、その隆盛を極めたり。而して、すでに、韻文にありて、散文に薄かりし古典的傾向は、多少の新意義を以つて、こゝに遺憾なく發揮せられて、云ふところ典故あり、述ぶるところ出處なからざ

勸懲主義

古典的傾向

るべからざることゝなりしを以て、衒學の風は、書冊の間に充滿せり。しかも、猶これを推稱し、讃嘆せるは、時と共に、國民の古典的修養の增進し、而して、これに偏重せるを見る。讀本は、云ふまでもなく、挿畫を主とせず、內容を主とするものなれば、必ず、その著想と、結構とを奇にし、讀者をして、一讀三嘆せしめざるべからず。前期よりして、この時期の中頃までは、結構は、未だ支離滅裂を免れず、風俗、人情の觀察は、從來の作物の風を承けて、巧緻なるものありといへども、全體に於いて、未だ幼稚の域を脫せざりき。然れども、その中期[7]以後に到りては、よくこの意を了解し、結構の精緻なる、著想の巧妙なる、他に比類なく、前後の照應も正しく、人物の性格も明らかにして、變化縱橫、波瀾百出して、應對に遑あらず、いはゆる拍案驚奇の妙あり。而して、當時學術の進歩せるより、その材料を仰ぐところ、和漢、古今に涉り、ことに、支那小

中期以後の進歩

支那小說の模倣

說は、當時の理想とし、模範とするところなるを以て、構造も、布置も、脚色も、或は人物も、それに模倣せり。かくの如きは、當時の、前代に向つて誇示するに足るべきところなり。

理想時代

然り而して、當時の官憲は、時事を直寫するを禁じたると共に、時人は、その學識の上よりして、理想とするところ、武人の全盛時代なる鎌倉幕府時代に在りしを以て、描寫するところ、自づから、その當時の古英雄、古豪傑に赴き、而して、これに寓するに、時事を以てしたり。その結果として、當時の政治的事實を描寫すれども、卑近に陷ることなく、却つて高雅、優美、而して古典的なる情趣を得たり。しかも猶、市井の雜事にして、嫌忌に觸るゝ事少なく、兒女の玩賞に値すべきものは、輕輕に看過すべからざるを以て、筆をこの方面にも著けたりといへども、時代の間隔によりて得らるべき優雅の趣は忘れず。すべて、前代の事として、當時の事とせず。今の匹婦、匹夫も、また前代の貞婦、烈夫として描出したり。

道德の體現

かく、時代を、悉く前時代に遡らしめたると共に、その主たる人物は、史實に於いては、不德、不忠、不義なるにも拘らず、多くは、道德の人とし、忠義の人とし、その不德、不忠、不義は、たゞ表面のみ、實は、敵を欺き、他の不道德者を瞞る方便のみとす。故に、史實上の忠臣、義士に到つては、もとより、眞の忠臣、義士にして、一擧、一動、悉く、君の爲め、人の爲めならざるはなし。些しも、人間通有の弱點をあらはさず。妻子の愛も、父母の孝も、皆忠の一字より發し、義の一語より出づ。この以外には、何の方便もなく、手段もなし。而して、天道は昭々たるを以て、屢〻災禍に罹り、萬死に陷るといへども、遂に、晴天白日、忠臣は明君と併び、義士は佳人と配するに到りて、大團圓は現はれ來る。主たる人物は、かく、

善の化身

忠臣、義士なるを以て、そのこれに對すべき副たる人物は、完全なる惡人なり。不德、不忠、不義にして、加ふるに惡才あり、惡能あり、譎詐百出、人の苦忠を妨げ、君の聰明を蒙ひ、一國、一郡を擾亂せずんば止まざらむとす。而して、これらの人物は、一度は、必ず勝利を得れども、不義は、遂に正義に敵せず、擧つて、忠臣、義士の刃に仆るゝに至る。故に、これらの作物に現はるゝ主たる人物は、人間と云ふよりも、寧ろ道德の化身なり。また、その反對にして副たるものは、すべて不道德の結晶なり。然れども、當時の道德の基礎を造れるは、性善說なりしを以て、この不德、不忠、不義者も、窮迫の場合に到りては、忽然悔悟し、忽ちにして、至善の人となる。故に、すべてに於いて、人物は、悉く義なり、忠なり、孝なり。換言すれば、善の化身なり。故に、その一擧手、一投足も、皆善の動作なり、これを外にしては何物も存せず。韻文の盛時には、人間を

佛法の因果律と宿命說と

統一的傾向

描けり。散文の盛時に、德を描けるは、儒道の浸潤甚だしきが爲めなり。而して、かく、この善の惡に勝つは、至當の理にして、儒道の道義觀よりすれば、これに加ふべきものあらずといへども、當時は、猶これに添ふるに、佛法の因果律、宿命說を以てせり。善の榮ゆるも、惡の衰ふるも、皆父祖の宿業による。善惡の因によりて、各その果を受くるものとす。故に、勸善懲惡と云へども、全然儒道のみにあらず、また佛法の敎理を混じたり。而して、時には、この間に於いて、神佛の靈驗、功德をも雜へて、善の勝利も、またこれによれりとす。この神佛の靈驗、功德を說くは、御伽草子以來人心に浸染すること深きもの、儒道萬能の勢を以てしても、傳習的思想は、破壞し盡すべからざりしなり。

以上の如く、讀本は、統一的傾向を持せり、而して、偏狹なる倫理說を以て、その旗幟とし、天下を風靡せり。然れども、婦女には、偏固に過ぎ、

反道德的思想

難澁に失したるが故に、これを通俗化する必要起り、黄表紙の系統を襲ひて、多くの繪を交へ、それに、雅俗混合の文章を加へて、一段階を下らしめたり。合卷物[8]は、これによりて出づ。而して、同一事件の連續は、讀者の倦厭を來すべきを以て、挿畫と共に變化を多くし、結構を複雜ならしめたり。故に、その結果は、不自然、不合理に陷りたること、隆盛後の淨瑠璃の如し。然れども、全體に於いて、勸善懲惡主義を脱せるもの、殆んどこれあらず。

道德的なる讀本其他のもの、その威力を逞くせりといへども、昌平の間に生じて、時と共に發展したる享樂的思想、更に云はゞ、反道德的思想は、すでに一般に溢溢せり。故に、洒落本[9]、滑稽本[10]續出し、前の儒道的道德を度外視したる遊里文學は、著しく發展せり。たゞ、後者は、滑稽を主として、無邪氣なる失敗を演ずるを描き、又は、社會の裏面を描きて、その矛盾し、枝梧して、笑ふべきものあるを笑ふ。この點に於いて、滑稽は諷刺を加へたり。而して、更に轉じて、うら若き男女の情事を本として、濃厚なる情趣を描き、滑稽も無く、諷刺も無く、たゞ、淫を誨へ、肉慾を寫すに止まるに到れり。人情本[11]は、すなはちこれなり。かくしても猶、教訓を標榜せるは、時代の勢止むを得ざるに出づ。當時の施政者、豈にこれを看過するを得むや。果然大鐵槌は降下したり。然れども、書冊は沒すとも、思想は、遂に禁遏すべからず。その度を降し、勢を減じ、相次いで明治に及べり。

概するに、第四期は、散文の全盛期なり。その思想も、結構も、脚色も、皆、當時の、學問の進歩と、儒道的道德の影響とを示して、餘あり。然れども、その勢の趨るところ、たゞ、學識そのものゝ、小說の形をとり、道德その物の、人間の姿を假り、學問と、道德と混合して、作物となりたる如

き狀態を呈したり。しかも、道德的態度あるものは固より、極力享樂的趣味を鼓吹せるものも、猶敎訓を標榜し、たゞ表面のみなりとするも、等しく勸善懲惡主義を取るに到れり。これ、韻文の最盛時と比して、甚だしき差異あり。內容としての論議は、大抵、かくの如し。今進んで、形式に移らざるべからず。

(1) 淺井了意等の諸作
(2) 井原西鶴等の諸作
(3) 江島屋其磧等の諸作
(4) 近路行者の作
(5) 建部綾足の作
(6) 山東京傳等の諸作
(7) 曲亭馬琴、山東京傳等の諸作
(8) 柳亭種彥等の諸作
(9) 山東京傳等の諸作
(10) 十返舍一九、式亭三馬等の諸作
(11) 爲永春水等の諸作

第一期

前代の繼承

二　形式

前代の餘響は、幾多の戰亂を經ても、未だ消滅し盡くさず。第一期に出でたる散文は、形體に於いて、遂に御伽草子の域を脫せず。行文は流麗なれども、新時代の影響は、未だ現はれず。たゞ、地理書[1]の如きものに、文學的色彩を加へたるは、一奇とすべくして、後世の名所圖會の魁をなしたるものなりといへども、文としては、殆んど云ふに足らず。その他に在つては、艶詞、麗語、往々記載の法妙なるを見れども、淺薄、陳套、また云ふに足るものなし。すべてに於いて、韻文に比して、散文は、內容的に進步せざりきとともに、形式的にも、また進步せざりし

第二期

なり。

第一期の韻文、ことに俳諧は、その及ぶところ、たゞに、一般の思想界のみにあらず、進んで、散文の形式に入れり。流滑、宛轉、委曲を盡くすは、散文のことにして、韻文のことにあらず。俳諧は、簡勁を要す、含蓄を要す。故に、古風の俳諧も、既にかくの如し。談林派の俳諧は、これに加ふるに、豪快、奇拔にして、連續すべきものをも切斷し、主題とすべきものをも省略して、讀者の想像に任せ、その間に、一種、簡勁の意を寓したり。浮世草子[2]の文は、實に、これより出づ。勿論、古風の俳諧者にも、猶かゝる筆法を弄する風ありきといへども、浮世草子の文は、これによらずして彼れに出でたり。すなはち、內容的に儒道的道德に反抗的なりしものは、從來の形式に對しても、また不從順なりしなり。

抑〻談林派の俳諧は、人の意表に出づるを主とす。故に、その影響

警句

緊縮の語句

するところ、文に於いても、亦必ず警句の出現なかるべからず。これを以て、その序するところは、市井間の些事にして、殆んど何人も、耳に熟したるものなりといへども、これを述ぶるに、多くの警句を以てし、しかも、これをもととして、簡勁なる批評を加ふ。故に、新たに聞き、始めて見るが如く、讀者は駭心、瞠目の感ありしなり。然り而して、なほ俳諧より來りたる簡勁は、また多くの緊縮したる語句を要す。故に、緊縮的用語は、頻々として出づ。この結果は、多くの助辭、時には、想像し得べき主語、客語の省略を來したり。これによつて、句そのものをのみ見れば、語々の連鎖全からず、普通の文法を以てしては、解釋し難きもの多しといへども、その印象するところは、甚だ深く、甚だ鋭く、短刃、小劍、直ちに、敵の肺腑を刺す概あり。

かく、簡勁にして意の完全せず、更に、語々の連續の全からざる句々

描寫の精粗

を連ねたるとともに、その觀察も、また一處に鋭かりしを以て、全體に於いては、一部にのみ精くして、他の一部に粗なるを致せり。而して、この精と、粗と、交々出でゝ、混合、錯雜するところ、淡粧、濃抹、云ふべからざる趣致を見る。かゝる省略は、すでに、平安朝[3]に於いても見たるところ、時には、要處をさへ一切省略して、更に筆を著けざるに、無上の妙ありき。然れども、猶その說くところに到りては、周到精密、讀者に、些の想像をも許さゞらしめたり。浮世草子には、かくの如き省略あり。然れども、その一局部に關しては、想像をも許さゞる程の描寫あらず。その間に、多少の考慮を費し、事實を補ひ、而して、全體の明瞭なる印象を得るが如くせり。これ、連歌の連續と、趣を一にせるところにして、しかも、因をそれに發せるものなり。すべてに於いて、浮世草子の語句は、俳諧より出で、更に、語々句々の連續も、また俳諧の連續より來りしなり。實に、平明なる、流暢なる假名草子の後に、かゝる新文章の出でて、散文界に新紀元をひらきたるは、異樣の感に打たれずんばあらず。俳諧の勢力の及ぶところ、驚嘆すべきなり。

變轉的興味

然れども、浮世草子の一轉したる八文屋[4]本に到りては、語句の奇警と、緊縮とは減じて、輕妙、宛轉の筆致は生じたり。然れども、漸次趣向に墮して、變轉的興味を主とするに到りしより、語句は、たゞ、それを正しく理解せしめむが爲めに、次第に平明となり、雅馴となり、浮世草子の特色を失墜したり。然れども猶普通の古典的形式の文に對しては、居然として一敵國の觀をなせり。この風は、次期を俟つて江戸に入り、諸種の文體を出だす地をなせり。

第三期

八文字屋本發生以後、京阪の文運の衰微に向ひし時、すなはち第三期に於いて、地を同じくして興起せし讀本[5]は、前者の現代を宗とせし

新古典的形式

に反し、一種の新味ある古典的形式を採れり。前に云へるが如く、讀本は、學術の隆盛に伴ひたる、支那小說の飜案より發せり。この類は、既に存在せしところなりといへども、比較的巧妙に、清新に趣向を彼れに借り、舞臺を我れに取り、牽强に失し、附會に陷るといへども、よく軍記物語の趣致を趁ひて、一種の史譚を作出し、浪曼的興味を發揮したるものは、これを以て嚆矢とせざるべからず。而して、これを行るに、現代語を以てしては、輕浮に失して、莊重を缺くべきを以て、軍記物語の和漢混交體を襲用して、威儀あらしめ、古色あらしめむとせり。しかも、猶、その內容に於いて、全然古典的ならざるところあり、屢〻現代に墮せむとするところ、却つて、また一種の趣あり。故に、古典的形式といへども、時代的新色彩の、隨處に躍動せるを見る。この新古典的傾向は、漢學及び國學の進步と共に現はれ來りたる新現象にして、

懸詞より生ずる滑稽

次期の最盛時の前驅をなせるものなり。たゞそれ、前驅をなせるのみ。その眞價値は、未だ多くを附與すべからず。

以上云ふところの文體は、直ちに江戶に移らずして、却つて、こゝに發生したるものは、黑本、赤本、黃表紙の輕快なる文體なり。これらは、直ちに、兒童の玩物より、大人の讀物となりたりといへども、形式的には、特に進步したるところあらず。その輕妙、洒落の筆致は、すなはち江戶的氣風の發現にして、當時の風俗、好尙の、遺憾なく露出せし結果なりとい雖も、抑〻又、京阪の浮世草子、八文字屋本を理想とし、模範と仰ぎたるによらずんばあらず。而して、その得意としたる滑稽は、多くは懸詞にして、牽强附會なるもの多く、これを以て眞の滑稽とは云ふべからず。たゞ、流水の如く、行雲の如く、輕快、縱橫、毫も澁滯箇處の態なきところ、他の模倣を許さゞるものあり。この輕妙、洒落の筆致

寫實的傾向の發展

の、一層進んで成れるものは洒落本なり。而して、到る處通を說き、粹を述べ、いはゆる野暮と、土臭きとを、土芥視して排斥し、都會的空氣の中に蘊醸したる滑稽の語句を續發すること愈〻多く、殆んど、應接に遑あらざらしむ。故に、その當時に生れずんば、眞の理解に到達することを能はざるもの多々あり。かく、滑稽突梯なるが間に於いて、極めてよく寫實し、寫生し、遊里、嫖客の狀態を詳說して、目覩するが如くならしめむとす。故に、その對話の如きも、悉く生語を用ゐ、しかも、これを以て文の主となせるを以て、寫實的傾向は、その極端にまで達せむとせり。これによりて、淺酌、低唱、攀柳、折花の景は、躍然として眼前に現はれ、四民遊樂の狀は、歷々として徵するを得べし。かく、現代的文體の勃興せしとともに、學術の進步に連關して、古典的傾向もまた起り、京阪の新古典的文體を有せる讀本は、初めてこゝに頭を擡げむとせり。現代的傾向に次いで、古典的傾向の起る、東西全く、その轍を一にせり。たゞ、前者は創作せるを以て長時間を要し、後者は繼承せるを以て、短期にして足れりしなり。

形式の膨脹

第四期

讀本、すなはち新意義を有せる古典的文體の隆盛は、第四期にあり。讀本的文章と云ふべき一文體は、始めて、こゝに完成せられたり。讀本の取れる舞臺の廣きと、結構の大いなるとは、未だ曾て我國にあらざりし大文章を出現せしめたり。實に、古來、當時の如き浩瀚なる純文學的作物の出でしことあらず。その冊數に於いても、またその紙數に於いても、當時の讀本は、古今獨步なりと云ふべし。而して、これらの模範となりしものは、軍記物語にして、云ふ處、悉く典故あり、出處あり、殆んど、自己の創意を許さず、造語を禁せり。故に、讀過すると共に、幼稚なるものは敎訓を得、學識あるものは、適合の妙を感じ、大方の

喝采は、これによつて起りしなり。然り而して、これらは、なほ支那小說の結構を襲ひて變化あらしめたると同時に、漢文の趣味の多くを注入して、從來の和漢混交文以外、更に一生面を拓きたるを以て、漢學尊重の當時の社會は、またこれによりても、感嘆の聲を惜まざりしなり。然れども、これらの、眞に價値あるところは、日本的なる、支那的なる諸種の分子を混合して消化し、同化し、渾然たる一團となし、統一的美を專にしたるにあり。而して、又その來ること、決河の水の如く、沼沼として止まるところを知らず、洋々として盡くるところを見ず、緊張せる筆力、揚々たる意氣、前に古人なく、後に今人なく、眞に、一代の大文字を現せるにあり。然れども、その長處は、すなはちその弊處にして、衒學的口氣は到る處に滿ち、一事を云ひ、一句を述ぶる、必ず出處を附し、典故を示して、自己の學識より來るを說明し、諄々として敎へて

統一的傾向

衒學的口氣

倦まざる風あり。これ、餘りに讀者を頑童視したる擧動にして、今日より見れば、一種侮辱の感なくんばあらず。ことに、同じ說明を、二たびし、三たびし、四たびするに於いてをや。支那小說より得たる俗語に、日本流の假名を付し、その博識を衒ひ、また自家の辯護をなし、時に、自讃をも敢へてするも、同じく厭ふべし。同樣の語句、同樣の描寫の續出するが如きも、尤然たる大冊なるを以てならむも、猶堪へ得べからざるところなり。文格の、一定の形式に陷り、その以外に脫出することを能はざるも、敍事の順序、譬喩の法、卷を換へ、冊を改むるも、猶依然として變ずるところなきも、軍記物語に比して、稍〻下品なる七五調の語句を隨處に挿入し、聲調をよくして、讀誦に便ならしめむとせるも、今日よりみれば、興味を損ずること甚だしきものなり。しかも、當時の好尙は、こゝに存せしなり。

單調の弊

時代の觀念の缺乏

猶、これらの散文は、その舞臺を、室町幕府時代、または、その少しく以前に取りたれども、淨瑠璃に於けると等しく、時代の觀念は、甚だ薄し。その主なる人物は、名は、その當時の人物そのまゝなりといへども、その他の人物は、その名に於いても、德川幕府時代のものなり。從つて、それらの言語、動作は、悉く、その理想時代のものにあらず。すべてに於いて、當時を離るゝこと能はず。これ、作者の學識の足らざるが致すところなりといへども、猶當時の讀者は、かくの如くならずんば、了解し得ざりしなるべし。これ、淨瑠璃に云へる時代の錯誤と、同樣の現象を呈せるものなり。

以上の缺陷ありといへども、散文としては、當時は、この以上に出づるものあらず。合卷物(10)の如き、人情本(11)の如き、滑稽本の如きは、到底これと比肩すべくもあらず、たゞ、これらの諸種の描寫の、微に入り、細を穿ちて、情景を髣髴せしめ、或は、滑稽、洒脫、人の願を解き、又は直截、銳利、人情の機微を穿つが如きは、決して棄つべからざるものなり。然れども、大月出でゝは、群星は光を收めざるを得ず。一種の學問的時代、街學的時代は、讀本をして、その盛運を恣にせしめたり。故に、この時期のこれらの文體は、決して他の追隨、模倣を許さず。第二期の韻文と相並んで、殆んど理想的境地に達したり。

結論

概言するに、德川幕府時代の文學は、韻文先づ發達し、散文これに次ぐ。而して、その散文も、實は韻文より發し、その助力によつて、新紀元を拓きたり。而して、韻文の隆盛時代は、散文の勃興時代にして、韻文の衰頽時代は、すなはち散文の隆盛時代なり。この事態は、よく平安朝時代と類似す。平安朝時代に於いては、奈良朝時代に衰頽せし韻文の、國民的自覺とともに隆盛となりしを承けて、散文は發達し、而し

平安朝と當代との類似

て、徐々に韻文の盛を奪ひて、その勢を擅にせり。たゞ、學問の流布、比較的盛ならざりしを以て、衒學的傾向、當代の如く甚だしく嫌厭の情を起さしめざるを覺ゆ。然れども、古事、出典相次ぎ、相重なりたるは、今日よりは不明に屬するも、當時に溯りてみれば、或は、衒學的臭味の鼻を掩ふべきものもありしならむか。こは暫く措く。上古、奈良朝の兩時代は、平安朝の準備時代なり。平安朝の隆盛を作らむが爲めに、準備せし時代なり。これと同じく、鎌倉室町兩幕府時代も、亦德川幕府時代の前行時代なり。德川期の黃金時代をつくらむが爲めに、前行せしのみ、而して、この平安、德川の兩時代は、共に、初に於いて、漢學の奬勵ありて、思想の一新を致し、而して、後に純文學時代に入れり。たゞ、後者は、遙に後なるを以て、その想の複雜、文の巧緻、度に於いて大いに進みたるものありといへども、大體に於いては一なり、大勢よりみれば、一も違ふところあらず。歴史は繰り返す、たゞ、多少の新意を以て繰り返す。情の文學の、道の文學となり、情念偏重の、勸善懲惡となり、而して、その大旗、大旆、天下を風靡したるところ、すなはち、その新なるところなり。この新なるもの、漸く、その勢を減じ、更にまた新なるものを要望するに到りて現はれたるものは、すなはち、次の明治時代の文學なり。

(1) 淺井了意等の諸作
(2) 井原西鶴等の諸作
(3) 源氏物語
(4) 江島屋其磧等の諸作
(5) 近路行者の諸作
(6) 山東京傳等の諸作
(7) 建部綾足の作
(8) 曲亭馬琴等の諸作

(9) 柳亭種彥等の諸作
(10) 爲永春水等の諸作
(11) 十返舍一九、式亭三馬等の諸作

第七章　主義中心時代（明治時代）

概說

思想の交雜及び代謝

王政維新の大業の成就してより、明治天皇崩御に到るまでの四十五年間は、實に從來の數百年に比すべく、否寧ろ數世紀にも及ぶべし。幾多の思潮の奔騰、洶湧、それに伴ふ社會現象の千變萬化は、觀る者をして、魂驚き、目眩せしめずんば、止まざらむとす。殊に、文學は、その思想の一廻轉、一曲折を、悉く體現するものなるを以て、その一主義、一傾向の消長、興亡に伴ふ發達、變遷は、これが研鑽に從事するものをして、なほ五里霧中に彷徨する感をさへ催さしむ。然れども、概するに、舊思想と、新思想の交雜、及び新思想相互の代謝より起れる紛亂に外な

らず。王政維新以後、舊慣は著しく破壞せられ、これと同時に、舊思想は殆んど拋却せられて、新習慣と共に、新思想は、代りてこれが地歩を占めたり。而して、この新なるものは、泰西のそれにして、しかも、彼れに於いて、數世紀の經驗を經て、到達したる種々の思想なり。かくの如きもの、汪然として我れに入り來りたるを以て、その紛亂、錯雜の狀を呈せるは、勢のまさに然るべきものなり。然れども、舊思想は、幾多の年序を經て、我れに適合すべく改造せられたる支那、印度の思想に、固有の日本思想を加へたるものなるを以て、一朝にして全然破壞し去らるべきにあらず。故に、又何時しかその頭角を擡げ來りて、この間に立ち、思想界の一方を占領せり。かくの如くなるを以て、從來、思想的に、東洋の日本なりしもの、今や一轉して世界の日本となり、更に、古今を兼ね、東西を併せたる、驚異の世界となれり。然も、此の間に於

純正の文學

日露戰役前

いて明白に認め得べきは、從來、佛法的教訓、或は儒道的教訓の爲めに利用せられし文學の、こゝに全然解放せられて、獨立、獨行すべくなれること是れなり。すなはち、特に、實用的意義ある一教義、一論證の爲めに應用せられずして、純正の文學、眞意義の文學となれること是なり。一主義、一傾向の、この間に於いて、消長、興亡するものありといへども、そはたゞ、文學としての理想に達せむが爲めの變化、最上の文學、至純の文學たらむとする努力に本づく結果に外ならず。

今これらの文學に就きて一考するに、維新より日露戰役に到る間と、その以後とは、全然情勢を異にせり。極めて大體に於いて云ふ。戰役以前に現はれし文學は、美の文學にして、戰役以後に出でしものは、眞の文學なり。役前の文學は、美を表現するを以て目的とす。讀者をして、忘我遊心して、現世の汚濁を去り、天の靈光に打たれ、神の御

物質主義

園に遊ばしむるを以て能事とす。概言すれは、非現實的なり。然るに、此の傾向は、戰後に於いて變化せり。文學は、眞に到達するを目的とす。個人を發揮し、實生活を活寫し、而して、これに由りて、眞を寫さむとす。故に、汚穢を避けず、猥雜を厭はず、たゞ視るが如く描寫し、而して、眞はこの間にありとす。概言すれば、現實的なり。此の差異は、古來嘗て夢想だにもせざりし處、驚異は、この點にも存すべし。故に、この時代の文學の大體の界線は、此處に引かるべし。而して、かくの如き變化は、その來るところ、實に此の時代の初にあり。抑〻維新以後の舊物の破壞は、それらの孰れもが、實際的生活に合致せざるにより、物質主義に適應せざるによれり。歐洲文明の、先づ我れに入りたるものは、物質的方面なり。故に、物質主義は、一世を風靡せり。此の主義に合致せざれば、何物といへども、破壞せられざるべからず。

基督教主義

この主義より觀察して、無價値なりし藝術は、殆んど、一顧をも與へられず、文學も、亦たゞ、前代の遺物の、僅に餘喘を保てるあるのみ。此の如く物質的に傾き、現實的に偏したる時代思潮は、社會的現象の複雜に趣くに從ひ、愈〻瀰漫したり。然るに、この同じ泰西の思潮に萌しながら、これと反對に、理想的方面を重んじ、人生問題に沒頭する一派出でたり。基督教を中心とする一流は、これなり。然れども、その勢微々として、大勢を左右するに到らず。世は滔々として、物質主義を謳歌したり。この間に於いて、政治思想は著しく勃興せり。この思想の根柢とするところ、自由、民權に在りて、全く他にあらざりしを以て、猶現實主義の外なるものにあらざりき。而して、この流布の手段として、文學の形式は利用せられたりといへども、たゞそれ利用のみ。故に、その文學としての眞價値は、認めらるゝ事多からず。此の頃、又

泰西思想の及ぶところ、幾多の飜譯、紹介は現はれ、彼れの文藝を、我れに傳ふるに勤むるものありしを以て、新文藝は、これによりて、漸く發達の緒に就くを得たり。然れども、これらは、猶大抵、政治に聯絡を有せる浪曼的作物にして、現實に遠く、空想的なるものなりき。この浪曼的、空想的傾向と、現實主義との矛盾を、自から調節し、文藝思想の根本的革新を促したるものは、寫實主義の提唱なり。これに依りて、寫實主義的傾向は起りて、散文界を風靡して一大勢力をつくり、至大の影響を及ぼしたり。但し、此の風調は、韻文界に入ること少なし、却つて、前の基督教方面より來れる主情的傾向、この方面に、その勢を逞しくせり。この歐化主義の極點に達するや、國民は、初めて、その弊處を發見して、瞿然として反省し、固有藝術を尊重し、固有道德を唱道するを念となし、こゝに國粹保存主義を起せり。これに連なりて、古文學

寫實主義

主情的傾向

國粹保存主義

の研鑽起り、從來閑却せられし固有思想と共に、固有の文辭、亦人口に上りて、散文と、韻文とを問はず、語句の穩當、雅馴を來し、從來の猥雜、鄙俗を一洗せり。然れども、寫實主義的なるものも、猶空想の範圍を脱せず。主情的傾向なるものに到りては、理想に專にして、現實に遠きこと甚だしかりしを以て、相率ゐて、漸次衰頽の悲運に向へり。この衰頽を以て、この時代は、その第一期に、前一小期を劃するを得べし。

日清戰役によりて得たる國民的自覺は、また既に、空疎なる寫實主義に飽かず。その思想的考察の深厚となりし結果として、更に新しく、且つ深きものを求めたり。これによりて、或は心理的思考、或は社會的觀察あらはれて、種々に動搖せり。これらの現象は、主として散文に於いて見るべし。而してこの間に、天才主義出で、個人主義現はれ、遂に進んで、本能滿足說に及び、美的生活の力說に到れり。この影

本能滿足說

主情的傾向の熾盛

新寫實主義

響は、前の主情的傾向、及び主觀的傾向の復興を促し、天才主義、個人主義の作品は、主として、韻文の形をとりて出で、その隆盛は、從來新文學としては、殆んど棄却せられし短歌にも及びて、新活力を與へ、新運動を起さしめたり。故に、この時代に於いて、主情的傾向の熾なる事、この時期の如きはなく、從つて、韻文の隆盛、またかくの如きはなし。その情熱の昂騰、感情の純潔、眞理に對する憧憬の熾盛、天才的氣分の躍動、古往今來、未だ比すべきものなし。然れども、餘りに理想的に、或は餘りに空想的にして、感情に偏し、戀愛に局し、現實的傾向に對しては、無關係なること甚だしかりしを以て、漸次衰運に向ひ、却つて、現實に立脚したる新寫實主義の興起を促したり。「新寫實主義の主張するところは、極めて簡明、たゞ自然の儘に描くと云ふに在り。前の寫實主義の、皮相的にして、且つ虛構的なるものに比しては、竿頭更に一歩を進めたるものなり。然れども、現實的生活に對しては、猶多くの間隔を有するものなるを以て、佛蘭西文學の影響を受けて、當時、一部の間に主張せられたる、複雜なる情緒の匂を表現せむとせる象徵主義と共に、更に、一層新しく且つ深く、現實に接觸する思潮の出づるを俟てり。忽ちにして、國家未曾有の大事件たる日露戰役は勃發し、國民の自覺は、根本的に喚起せられたるを以て、この新思潮は忽ちに起りたり。故に、この時代の文學は、確かに、こゝに二分せらるべく、また從つて、その第一期の後一小期は、こゝに終るべし。」

象徵主義

日露戰役後

日露戰役は、日清戰役より以上に、國民の自覺を確實にしたり。世界的國民としての地位を十分に認識すると共に、個人は、また個人としての價値を考察せり。而して、徒らに、空想的、超自然的、藝術的にして止まるべからざるを知り、更に、現實に對する眞摯なる研究の、急に

すべきを知れり。而して、この時に當りて、盛に輸入せられたる西歐、北歐の新文藝思想は、或は、世紀末的懷疑思想、或は無解決的思想、個性發展的思想を敎へしを以て、個人の權威を主張し、自我の發展を窮極とする風一世を蔽ひて、こゝに、自然主義は急激に發展し、そを體現せし幾多の作物は、頻りに現はれたり。而して、この主義の向ふところ、兩三年間は、舊思想に對する消極的破壞あり。それよりしては、熱烈なる勢力の下に生せし多くの積極的建設あり。此の如きもの、散文、韻文の孰れをも通じて、當時の一大潮流をなせり。しかのみならず、その形式的區別も、殆んど消滅して、兩者は合して、一新文學の形をなさむとせり。これによりて、虛僞の人生の空疎なる描寫は、眞の人生の適切なる寫實となり、技巧、修飾の意義は一變して、たゞ、如實に現實を描寫する手段となれり。かくして、美の文學、空想の文學は止みて、

自然主義

眞の文學、現實の文學は起れり。この人生と、藝術とを一致せしめたる一大改革は、有史以來の大事件にして、且つ空前の偉觀なりと云ふべし。

餘裕派
享樂派
新浪曼主義

然れども、この新傾向の特色は、專ら客觀的にして、人間を靈長的のものとせず、たゞ、一個の生物として觀察し、又その暗黑面を暴露し、しかも、無技巧的描寫によりて表現するにあり。この故に、急促の感あり、悠揚の態なく、悠々自適の趣なきを以て、こゝに、餘裕派の興起を促し、更に、現實に立脚して、歡樂を追求する享樂主義派の現出を招き、而して、大正の時代に入り、又更に、新浪曼主義の活躍を示さむとするなり。この時代の文學の第二期は、こゝに終るべし。

要するに、この時代に於いて、文學は、未曾有の大變轉をなせり。その最初の時期に於いて、前代を承けたる舊文學は滅して、新文學の基

創始期

礎は置かれたり。然れども、これらは、孰れも浪曼主義にして、當時の現實思潮と風馬牛なるものなりき。これを創始期と云ふべし。然れども、漸次覺醒の機運は生じ、寫實主義起りて、一代を風靡するとともに、現實との距離は、漸く近づけらるゝに到れり。これを、寫實主義全盛期と云ふべし。

寫實主義全盛期

然るに、この主義も、また暫見すれば、根柢を現實に置けるが如くなれども、猶部分的寫實、皮相的寫實にして、個人性の描出を閑却し、眞人生を活寫せず、現實との溝渠は、溝渠として存在せり。故に、この缺陷を補はむが爲めに、諸種の運動起り、遂に、新寫實主義は出でたり。これを、舊文學と、新文學との過渡期と云ふべし。これよりして、啻に當代のそれのみにあらず、舊來のすべての美を目的とする文學は、こゝに衰滅して、直ちに、現實に突進して、個人性を發揮し、人生の眞を傳へむとする自然派文學は興起したり。而して、この

過渡期

自然主義全盛期

自然主義全盛期を以て、この時代の幕は閉されたるなり。實に、この時代は、僅々四十五年間に過ぎずといへども、各種の主義と終始して、前古未曾有の大變轉を示せり。而して、その主義の一起一倒に、多大の意義あり、これに伴ふ思想的廻轉の急遽、敏速なるに、また多大の教訓あり。すべてに於いて、後世を指導し、啓發して、餘あるものと云ふべし。

第一節　韻文

一　內容

第一期

第一期前期

維新の改革以後、千轉萬旋せる時代思潮に追隨して、變化し、發展し、而して、非現實的態度より現實的態度に、無自覺的態度より自覺的態度に入りしものは、この時代に於けるすべての文學なり。何等特別の制約なく、情緒の流れ、思想の進るに任せて、些の凝滯なかるべき散文は、先立つてこれを體現せり。これに反して、韻文は、辭句に制限あり、格調に拘束あるを以て、その進歩、發展、前者に比しては、顯著なること能はず。たゞ、從來の制約を破壞し、直截に、露骨に、自己を表現し、時代思潮に合致せむと努力せしは、空前なるのみならず、また、或は絕後なるべき現象と云ふべきなり。而して、新體詩の現出は、これが先を

時代思潮合致の努力

なせるものなり。

舊慣を打破して、新文明を建設せむとするは、新空氣を呼吸せるものゝ、夢寐にも忘れざるところなり。舊套を守れる短歌と、墮落せる俳諧とのみが、唯一の韻文の如く、文學不振の中に立ちて、相當の權威を有し、ことに短歌は、帝室の保護の下に、纖弱なる聲調、狹隘なる思想を歌ひて、晏如たるものあり、但し、その宗とするところ、桂園の一流なりしを以て、他の地下の流派に對しては、材料の自由あり、著想の清新ありきといへども、猶、遊戯的境地を脫出すること能はず。俳諧は、その作者、平民社會に多く、その流布すること、依然として舊の如しといへども、元祿當時の眞精神を遺却して顧るところなし。かくの如くなるを以て、これらによりて、新思潮を鼓吹し、新思想を發揮せむは、木に緣りて魚を求むるよりも難し。故に必ず、他に更に新しき或者を

得て、表現の資となさゝるべからず。然るに、當時の極端なる歐化主義よりして、多くの泰西の詩は讀まれ、且つ味はれたり。その想は甚だ深く、その材は最も豐かなり、而して、放奔自在、思うて歌はざるなく、欲して云はざるなし、稱して詩と云ふものは、よろしく、此の如くなるべし、わが從來のものゝ如く、淺薄、狹隘なるべからずとして、範をこれに取りて、こゝに、新體詩の一體をつくられたり。而して、この事、散文の覺醒より先つこと數年なるを以て、その順序を以て進まば、この時代の韻文は、散文よりも一層の發達と、進歩とを見るべかりしなり。然れども、この改革は、主として、詩の形態そのものにありて、內容に及ぶこと比較的鮮少なりしのみならず、その作者は、學者にして、詩人的素質に乏しかりしを以て、その飜譯の、思想界を益するに止まり、未だ保守主義者をして、驚嘆、瞠目せしむること能はざりき。たゞ、詩界の

陳腐たりし功は、決して沒却すべからず。散文の覺醒次いで起り、新作物の新聲を上ぐるもの、續々として輩出せしといへども、詩界は、未だ、新時代の詩として、讴唱するに足るものを產せざりき。

歐化主義に對して起りたる國粹保存主義は、古文學の研鑽を伴ひしを以て、形體は新體詩にして、擬古的傾向を有するものを現出せしめたり。而して、またこれと相距ること遠からず、泰西の散文の飜譯に伴ひて、その詩歌の情緒と、聲調とを、正確に傳へむとするもの現はれ、それらの結果として、こゝに二樣の潮流を生せり。すなはち、固有の感情を基として、新思潮に合せむとするものと、西詩の面影を傳へて、直に新感想を述べむとするものと、これなり。詩歌に關する根本的論爭、これより漸く盛となりきといへども、その多くは、格調に關して、內容に及ばざりき。

主情的傾向

この兩派の中、泰西[5]の詩の聲調を引けるものは、漸次多きを加へたり。而して、その取材の範圍の廣汎なると、その感情の純正にして、悲哀の色を帶びたると、著しく神經的にして、人生に對する煩悶の深刻なると、理想に向つての希求の熱烈なるとは、よく當代の新人の苦惱を現はせり。然れども、その云ふところ、餘りに主情的にして、空想に失し、當時の非藝術的、現實主義的傾向に對して、背馳すること甚だしかりしを以て、衰運はこれより起れり。然れども、その扶植せしところのものは、次期に於いて多大の結果を示し、優に、新文學、新詩歌として、後世に誇稱すべきものを出せり。この時代の文學の第一期の前期は、この主情派韻文の衰頽に劃するを得べし。

新詩歌と共に、新脚本も起らざるべからず。たゞ、脚本は、韻文とは少しく勢を異にし、著しく國粹主義と、寫實主義とに影響せられ、新脚本の、夢幻劇的傾向を脱し、寫實的傾向を帶ぶるもの漸く出でたり。

寫實的傾向

これを、文學の他の種類に比すれば、後るゝこと甚だし。この間に、又飜譯[7]脚本の、盛に新傾向を傳ふるありて、漸次、革新を助長せりといへども、未だ新しき脚本の、一世の視聽を欲つべきもの出でざりき。

第一期後期

前期の新詩歌の興起は、別に、短歌の方面を刺激して、第一期の後期に於いて、未曾有の革新を起さしめたり。短歌は、從來舊套を墨守して、その範疇を脱出すること、一歩だにせしものあらず。稍〻その新を唱ふる、御歌所派の如きものありきといへども、特に、面目を一變せしものあらず。殊に、既に、一度泰西の文物に接し、新空氣を呼吸したるものに於いては、到底その範圍の狹きに堪ふべからず。故に、その一部は、新體詩の、比較的自由にして拘束なきに向つて走りたりといへども、猶、新思想にして、この小形式に盛るべきもの、多々存在せるの

みならず、古文學の研究の結果、短歌の本質の、此の如くなるべからざるあるを以て、こゝに、根本的革新は企てられたり。すなはち、その取材の範圍を廣くし、思想の制限を撤して、自由に、放奔に、その所思を歌ひ出でむとするにあり。この故に、從來全く見ざりし清新の想に富み、感情の流露に伴ひたる短歌は、初めて現はれたり。而して、この中に就いて、固有思想[8]を根柢としたるものと、西詩[9]の情趣を多量に加味せむと努めたるものと、漢詩[10]の趣味を加へたるものと、更に、俳諧[11]的興味を中心としたるものとあり。趣舍は異なりといへども、舊套を脱して、新趣味を鼓吹せむとするに於いては一なり。而して、從來主として貴族の有、婦女の有となりし短歌は、こゝに於いて、初めて平民の有、國民一般の有となるに到れり。然れども、その云ふ處、一般的感情を基として、空想に流れ、虛構に落ち、普汎的趣味を固執して、個人を輕視し、自己を重んせず、自覺の域に遠かりしもの多かりしこと、猶新體詩に於けるが如くなりき。

俳諧も、また時を同じくして、革[12]新の實を擧げたり。その根柢とするところ、短歌に於けると等しく、新氣運、新思想に促されたるものなり。而して、古典研鑽の結果、天明期の清新、雄快の寫實的傾向を把持し、更に、元祿期の幽玄、枯淡の趣をも傳承し、而して、複雜なる自然と、人事と、その時間的推移をも描出し、舊慣習を破却して、新しき俳の天地を展開せり。かくの如きもの、蕉風の興起と、殆んど趣を一にすと云ふべし。

日清役後、國民の自覺の起り來れると共に、新體詩に於ける擬古[13]派の勢力大いに揚りて、儼然として、覇を一方に唱へたり。すでに、この時に於いては、純然たる擬古にあらず、泰西の詩趣を入るゝこと多く、

情味の豐かに、韻致の高き、渾然として美玉の如きものあり。然れども、想に於いて深きものなく、情に於いて熱せるところなく、たゞ、鳥の如く歌ひ、水の如く歌ふのみなるを以て、漸く、世の嫌厭を來し、更に、根(14)柢を西詩に有する一派、これに代りて、詩壇の帝王となるに到れり。

主情的傾向の全盛

而して主情的傾向は、こゝに全盛となれり。

この主情的傾向の全盛期は、實に新體詩の全盛を示したるものなり。或は、純正なる感情を本として、自然を歌ひて生命あらしめ、更に熱烈なる戀愛を歌ひて、銷魂せしむるものあり。或は瞑(15)想的、哲學的にして、理想の標置、特に高き者あり。然れども、これまた、孰れも技巧に偏して、現實に遠く、自覺的境地に達すること能はざりき。而して、これらの傾向に連れて、一層の發展を來せる短歌は、天(16)才的技能を發揮して、從來歌人の嘗て夢想だにせざる新境地を開拓するに及べり。

而して、その歌ふところ、情熱的なること新體詩と同樣にして、天上の星、地上の菫、その滿腔の熱情を表現する、唯一の表章となりたるを以て、星菫黨、星菫趣味の語は、當時の新詩人を蔽へり。この頃、新體詩の情熱的傾向は一轉して、古(17)典的叙事詩となりて、屢〻新彩を發したりしが、終に象(18)徵詩の出現に到りて、こゝに、最も重要なる變化に遭遇せり。その主唱者の說く處は、すでに、思想に新意あれば、表現に新方式を要す。世紀末的思想の、深酷なる、且つ幽玄なる人生觀は、普通の言說以上なるを以て、邦語の制約を寬うして、その情緒の句を傳ふべきのみと云ふにあり。故に、これらの詩は、解し得る者にのみ解せられ、大體に於いては、晦澀にして、殆んど、その句だに味ふ事能はず。ことに、その感情、官能、思想の交錯を表現せむと努めたるに對しては、愈〻朦朧として、何物をも捕捉すべからず。これを以て、舊趣味に傾きた

象徵主義の出現

るものは、邪路に陷るものとして嫌厭し、排斥せりといへども、泰西の新詩趣を味ひたる人々の多くは、等しく、讃美の聲を擧げたり。これ、かくの如きは、我が國の詩として、初めて到達したる境地なればなり。然れども、現代的要求を離るゝこと、猶一歩なりしを以て、更に、一層現實に觸れ、一層個人を發揮せよの聲は起りて、詩壇は、また一廻轉をなせり。

この時期に當つて、大いに活氣を呈したる脚本は、その革新、先づ史劇より初まれり。史劇[19]の要は、過去の人事の眞相を表現するにあり、たゞ寫實的なるべからずと云ふによりて、その試作は公にせられたり。然れども、現實的に傾ける世人は、却て藝術的價値に乏しき壯士劇的のものを謳歌したり。この間にありて、猶新作は跡を絶たず。ことに、飜譯脚本の多くは現はれて、新氣運に合したり。新樂劇[20]の論も、この時に起りて、過去の樂劇を本として、更に新しきものを起さむとせり。これもまた、劇曲として始めて到達したるものなること、象徴詩と揆を一にせりと云ふべし。

現實的傾向の盛

第二期

現實を對象とする態度は、すでに存在せり。日露戰役後、自然主義の唱道旺にして、散文ことに小說は、悉くその方向を取りしを以て、その餘波は、激して詩壇にも及びて、現實的傾向は愈〻盛となり、自然主義的象徴詩[21]は、これによりて主張せられたり。而して、形式を破りて、內容の流露に任せずんば、眞の詩歌は出づ可からずとして、口語[22]の詩は力說せられ、試作せられて、新情趣は、その形態の下に、凝滯するところなく歌はるゝに到れり。かくの如きは、實に從來の、詩の爲めの詩、技巧のための技巧を離れ、人生の爲めの詩、個人の爲めの詩となりしものにして、新體詩發生以來の無自覺的運動は、こゝに到りて、眞に到

韻文の歩調の一致

達すべき自覺の域に入りしなり。この運動の及ぶところ、先づ短歌の動搖を起さしめたり。情趣を主として、現實を顧みず、美ならむが爲めに、多少の虛僞をも敢へてし、しかもなほ、眞實を裝ひたる舊短歌は、こゝに改まりて、眞の人生、個人の發揮の具となりたり。俳句に於いても、また一變化を起して、新傾向は、舊套を蟬脫して、新文藝と、歩趨を一にせむとしたり。この風は、川柳、狂歌等にも波及せり。前期に起りし新樂劇は、この要求に關しては、無關係なるを以て、發展著しからず。却つて、近代的思潮の紛亂と、自我の實現とを描寫したる幾多の脚本[24]は現はれたり。これによりて、脚本も、また他と全く歩調を同じくすることを得たり。かくして、すべての韻文は、等しく大正の新時代に向つて進まむとするなり。

(1)井上巽軒、外山、山等の諸作
(2)落合直文の諸作
(3)森鷗外等の諸作
(4)日本韻文論等
(5)北村透谷等の諸作
(6)福地櫻痴、坪内逍遙等の諸作
(7)森鷗外の飜譯
(8)落合直文
(9)佐々木信綱
(10)與謝野鐵幹
(11)正岡子規
(12)正岡子規等
(13)武島羽衣、鹽井雨江等の諸作
(14)島崎藤村等
(15)土井晚翠の諸作
(16)與謝野鐵幹、同晶子

(17) 薄田泣菫の諸作
(18) 蒲原有明の諸作
(19) 坪内逍遙
(20) 坪内逍遙の諸作
(21) 岩野泡鳴
(22) 相馬御風
(23) 河東碧梧桐等
(24) 佐野天聲等の諸作

二　形式

第一期　第一期前期

思潮の變化の、內容に現はるると共に、形態に現るゝは、明確なる事實なれども、內容にのみ急なるときは、形態に緩なることあり。然るに、舊慣習の破壞は、維新當初の一般の風潮なりしを以て、思想の發展とともに、舊形式の打破は直ちに起りたり。新體詩の興起は、すなはち

ちこれなり。

新體詩の勃興に到るまでは、內容に於いて云へると同じく、殆んど唯一の韻文なる短歌と、俳諧とが、前代の形式を襲用せしのみにして、何等の新じき處なく、改めたる處を示さず。故に、當時の新進氣鋭の士は、これらは孰れも、その滿腔の情志を發舒するに足らず。過去の文學の形式は、過去の形式たるべし。現在の文學は、現在の形式を採らざる可からずとして、範を泰西の詩に取り、詩語の範圍を廣くし、舊形式の七五の兩句を重疊、褶積して、從來の詩形を擴張したる一[1]詩形をなせり。かゝる形體は、當時初めて現はれしところにして、散文の舊形式を擺脫せしものよりも、猶早きこと數年なるを以て、新韻文は、新散文よりは、形式に於いても、一歩早く發展の途に就きしなり。而して、この革新詩は、未だ詩としての價値を認むるに足らざりきとい

へども、この形式的革新は、當時に在りては、驚嘆すべきものと云ふべし。たゞ、その句形の、如何なる想を現はすにも、殆んど、七五の連續にして、しかも、所々押韻して、それを理想的詩形と信ぜしが如きは、無用の遊戯と云ふべかりしなり。

純擬古體

國粹保存主義の勃興せしより起りたる古典研究の風は、飜譯と、創作とを問はず、詩語の雅馴と、整頓とを來し、前の蕪雜と、平俗とを一掃せり。而して、この傾向によりて起りたる純擬古的のものに到りては、この風ことに著しく、流暢なる七五調は、よく優美、溫雅の致を發揮したり。これに反して、專ら西詩の系統を引けるものは、原詩の聲調を傳へむが爲めに、種々の格律を取り、或は八七調を用ゐ、或は散文的なるものを用ゐたり、その他に於いても、或は八六、五五、五七五一聯のものもあり。然れども、世は猶七五調を以て、基礎的聲調の如く思惟して、これを固執せり。而して、これに連なりて、詩歌の根本的研究漸く起りて、格調論は、當面の問題となれり。然れども、たゞ論議のみにして、模範的創作は出でざりしなり。かゝる間に於いて、西詩の系統を引けるもの、漸次勢力を占め、その内容の深く、且つ廣きと共に、詩語も自由なるを以て、諸種の格律、聲調、相次いで出でしも、猶七五調の全盛期として、この第一期の前期は終れり。脚本は、韻文と反對に、散文と歩調を同じくし、國粹主義、寫實主義の影響に依りて、過去を再現するを主とし、事實も、正史そのまゝなると等しく、用語も、また時代と離るゝを許さず、古書の朗讀、暗誦をさへ惹き起せり。然れども、新飜譯脚本出づるに到りて、この傾向は漸く變じて、多くの自由を示すことなれり。

七五調及び以外の格調

七五調の全盛

第一期後期

短歌と、俳諧との革新は、第一期の後期に於ける大現象の主たるも

のなるべし。國初以來、純正の國語を用ゐて、殆んど、外來語の闖入を許さず、時代的潮流の來去する間に卓立して、見るべき動搖を起さざりし短歌も、新思潮の奔騰に遭ひては、遂に舊態を守ること能はず、その用語の範圍を廣めて、外國語、現代語にも及び、西詩の趣を容れ、漢詩の調を取り、或は俳諧の句法を加へて、こゝに、新短歌を出したり。[9] 然れども、未だ三十一音の制約を破壞して、新形式を樹立するものはあらざりき。[10] 然るに、俳句は、前代の末の餘勢を承けたる月並の風を脫して、放奔自在、漢語をも、俗語をも、採用して、五、七、五の形式を破壞し、その以上の音數を取るものをさへ生せり。短歌と、俳句と、共に舊形式の詩にして、新形式のそれにあらずといへども、此の如き革新は、寧ろ創作に等しき價値あるものとして推稱すべし。然れども、これを新體詩に比すれば、自覺の域に遠きこと、一層なりしは云ふを俟たず。

用語の廣汎

舊形式の打破

新體詩に在りては、此の時、擬古派[11]の勢力大いに昂れり。從來の國語の、純正、雅馴なるものを取り、これに、西詩より來りたる清新の想を託し、整齊、醇雅の趣を得たり。故に、前の擬古派とは、全然價値を異にすること、既に述べたるが如しといへども、形式のみの整齊、醇雅は、重きを內容に置きたる時人の飽かざるところなり。故に、主情的傾向盛となりて、長篇[12]大作は、この方面より現はれたり。然れども多くは、情緒の幽雅に伴ひたる語句の清新にとゞまり、七五調以外に、特に注意すべき形式を出ざず。却つて、主情派ながら、瞑想的、哲學的なる一派[13]は、格調の雄健を希ひて、漢語の多くを用ゐ、漢詩の調を採りて、豪宕の趣を得たりしが、猶その多くは、七五調に局して、他に及ぶこと少なかりき。すべてに於いて、新體詩の勃興より、この時期に到るまでは、猶七五調の隆盛期と稱すべし。[14] 短歌も、これと同じく主情的にして、然

七五調の全盛の繼續

かも、情熱の高度に達せしもの現はれしを以て格調は漸く自由に、用語は大抵奇拔にして、往々嶮奇に走り、晦澀に陷るものあり。此の如きもの、亦國初以來初めて見る處なり。但し、俳句は、漸次平淡に趣き字餘の句は多く現はれず、これ、內容の進歩に一段落ありしが爲なり。

古語の復活

新體詩の形態は、古典的叙事詩出づるに及んで、著しき變化を生じ、古語の新しき意味ある復活を來したり。然れども、その弊とするところまた晦澀にあること、猶新短歌の如くなりしを以て、當時の現實的傾向とは、大いに背馳したり。これによりて、象徵詩的傾向起り來りて、更に著しき變化を示せり。象徵詩の興起は、實に、異常の變化を詩壇に與へたるのみならず、その辭句に於いても、また不可思議の狀態を呈せしめたり。感情、官能、思想の交錯は、一種異樣なる語句を作らしめ、細かにこれを味ふにあらずんば、到底理解し得ざるものあり。

異樣の語句

況んや、その象徵とせる物象の、裏面に存在せる思想の、何物たるかを識別し、更に、その情趣を味ふに於いてをや。故に、これらの詩は、たゞ、一部の人々にのみ解せられ、一般には、朦朧、晦澀として、棄てゝ顧みられざりき。然れども、此の新技巧にあらずんば、到底、幽遠、細緻なる情緒は傳ふべからず、朦朧、晦澀は、實に止むなきに出で、しかも、作者その人にありては、或は明快に過ぐるものありしなるべし。かくの如きは、主として、佛文學の影響にして、世紀末的思想より來れること、前に云へるが如し。脚本も、この時期に到りては、既に、舊態にあらず。擧動の自然を希ふとともに、臺辭もまた自然にして、作爲の跡を沒したり。たゞ樂劇は、その性質、遊心的なるを以て、音樂的要素の多くを含みたるに於いて異なれり。

新技巧

日露戰役より來る現實に對する研究は、從來の態度を一變せしめ

て、自然主義は起りたり。これによりて、自覺的態度は發し、その及ぶところ口語體[19]の詩となれり。その意、新情緒、新思情を、直截に歌はむには、從來の死語は、何等の効力なし、新時代の詩としては、必ず生語を取らざるべからずと云ふなり。これによりて、韻文は、散文の言文一致と合致することとなれり。勿論、口語の詩は、既に現はれきといへども、多くは、古典的なる俗謠の形式によりしのみにして、決して、內容律と全然合致したるものにはあらざりき。故に、この出現は、この時期に於ける新詩發展の程度を示して、餘あるものなり。短歌も、亦この主義の興起によりて影響せられ、その形態自づから寬容となり、內容と、形式との一致は、著しく注意せられたり。而して、漸次口語を入れて、試作することとなりたりと雖も、その全體の形態の古典的なるを以て、他の新韻文と、步調を等しくするには、大いなる困難を感じたり。

口語體

現代的傾向

結論

俳句はいはゆる新[20]傾向の勃興となり、句形もまた一變して、その革新當時のものゝ如きあり。脚本も、また同樣の影響を受けて、過去の人を描くにも生語を用ゐるに到り、全く因襲的興味を脫して、他と角逐し得るものとなれり。

要するに、時勢の變轉と共に、前代文學は凋落して、新時代思潮の發現、ことに歐化主義に偏したる思潮の發現は、こゝに新韻文を呼び起して、新文學の先驅とならしめたり。然れども、これらは、大抵浪曼的にして、現實に遠く、思想に於いて、形式に於いて、遊戲的態度を脫すること能ざりき。而して、歐化主義の反動として、國粹保存主義の起り、主情的傾向の始まれるとともに新韻文も、また一革新に際會せりといへども、猶現實的思潮と合せざるを以て、次いで來るべき變化を待てり。浪曼的主義に次いで起りしは象徵主義にして、これによりて、

新韻文は再び變化せり。然れども、一部に局して、全般に渉らず。自然主義の起りて散文界を風靡したるより、その影響するところ、新韻文は、こゝに無自覺的態度を一變して、自覺的態度を、取り而して、未曾有の盛況を呈するに到りしなり。

(1) 井上巽軒、外山丶山等の諸作
(2) 落合直文の諸作
(3) 森鷗外等の諸作
(4) 山田美妙齋の諸作
(5) 日本韻文論等
(6) 島崎藤村等の諸作
(7) 福地櫻痴等の諸作
(8) 森鷗外等の譯譯
(9) 落合直文、佐々木信綱、與謝野鐵幹、正岡子規
(10) 正岡子規等
(11) 武島羽衣、鹽井雨江等の諸作
(12) 島崎藤村等の諸作
(13) 土井晚翠の諸作
(14) 與謝野鐵幹、同晶子等の諸作
(15) 薄田泣菫等の諸作
(16) 蒲原有明の諸作
(17) (18) 坪內逍遙の諸作
(19) 相馬御風等の諸作
(20) 河東碧梧桐等の諸作

第二節　散文

一　内容

美を窮極とするもの、眞を目的とするもの、この時代の文學の、こゝに、劃然たる二大別を生ずること、既に云へるところの如し。韻文に於いて然りしが如く、散文に在つても、また然らざるを得ず。故に、この時代の最初よりして、終局に到るまでの散文の情勢の、波瀾曲折、紛糾錯雜、容易に識別し難きものも、達觀すれば、畢竟、美より、眞に轉移する道程を示せるのみ、更に云はゞ、文藝と、人生と、殆んど無關係なりしもの、時を經て全然合致するに到る徑路を示せるに止まれり。而して、その散文の、眞に、時勢の進運に伴ひ、時代思潮の奔騰、狂湧を體現せるものは、多數の小說の外にあらず。故に、これより云ふところ、多くそれらの範圍を出づること能はず。而して、その時間的區劃の日露戰役にあること、猶韻文に於けるが如し。

第一期　第一期前期　現實主義

維新の大革新に伴ひて、著しく勃興せしものは、現實主義なり。精神的傾向を斥け、藝術的傾向を斥け、たゞ、實際生活の幸福をのみこれ逐ふ功利中心主義なり。この故に、散文は、全く度外視せられ、從つて、多數民衆の玩賞するところとなりし小說の如きも、辛うじて、前代の餘勢を傳ふるのみ。而して、それらのもの、いづれも、淺薄なる勸善懲惡主義にあらずんば、低級なる享樂主義を主としたるを以て、殆んど、識者の顧るところとならず。却つて、この思潮に伴ひて勃興したる政治熱は、官權の壓迫と、社會の要求とによりて、自由民權を主張したる幾多の小說を出し、而して、世の歡迎するところとなれり。然れども、かくの如きものも、脚色と、構想とに、その妙を存するのみ。空想的

政治熱

歐化主義

にして、非現實的なるは、前代の餘勢を承けたるものと、殆んど大差あるを認めず。

この現實主義に伴ひたる盛なる歐化主義は、漸次、彼れの文藝の飜譯と、飜案とを持來らしめたり。故にこゝに、從來嘗てあらざりし清新なる、奇拔なる、世界的なる新散文は、國民の面前に展開せられたり。而して、舊物を認めざる若き人々は、等しくこれに向ひたり。然れども、此の類も、また主として、傳奇的、空想的のものにして、非現實的なること、前者の如く、現實と隔離すること、甚だ遠きものなりしを以て、全く社會の渴望を滿たすに足らざりき。

かくの如くして止まば、文學は、遂に、根柢より倒壞して、また起たずして止むべかりしなり。然れども、こゝに、これを復活せしめて、新活躍をなさしむべき新文藝主義現はれたり。寫實主義は、すなはちこれなり。空想は排すべし、勸懲主義も斥くべし。それが爲めに、不自然なる脚色は唾棄すべし。たゞ自然のまゝに描け。其處に、最高位の文藝は存せりと云ふなり。この自覺に近き革新運動は、寫實主義小說を起し、從來の面目は爲めに一新せられて、性格の描寫も、自然にして浮誇に陷らず、その波瀾も、葛藤も、世間の通有性を帶びたるものとなれり。而して、その前者の聲言は、英文學より來り、後者の描寫は、露文學より出づ。日露戰役以後に到りて、露文學の思想、小說界を風靡せしは、その因、實に此處に在り。

寫實主義の興起

以上に次ぎて現はれたる寫實主義に立脚せる多くの小說は、前者と少しく趣を異にし、絢爛の想、彫琢の辭、甚だしく世人の歡迎する處となれり。而して、當時の歐化主義に對する國粹主義の勃興は、古文學の研鑽を來しゝが、前代の浮世草子の、當時の傾向と偶合せしを以

寫實主義の隆盛

文學の眞價の認識

て、元祿期の文學は、こゝに復興して、新文學に多大の影響を及ぼせり。然れども、これらのもの、猶技巧の爲めの小說、脚色の爲めの小說に陷り、現實的なるが如くにして、人生に遠く、空想に走れり。此の間に立ちて、精神的方面を重んじ、一種の觀念を活寫せむとせるものありといへども、畢竟、無自覺なる外形的寫實に過ぎず。此の如くなれども、これより、小說の價値は大いに昂り、作家の地位も、亦大いに高まり、文學は、遂に遊戯にあらずして、嚴肅なる意義あるものとして、目せらるるに到れり。而して、飜譯と、梗概的紹介とは、社會全般を通じたる歐化主義に伴ひて愈〻盛にして、從來の主たる英に加ふるに、獨、佛のものゝ多くに及び、その文學批評の法、また深く我れに入るに到り、小說は、想に於いて深く、材に於いて廣く、描寫の方法に於いて、自由、不羈となれり。たゞ、これらの寫すところ、平凡なる青年子女の戀愛談に過ぎず、豪宕、雄健の趣に缺けしを以て、更に、一流の傳奇小說を起さしめたり。然れども、これまた誇張、浮靡にして、心理的解剖もなく、殺伐、疎豪の氣、楮表に溢れしのみなりしを以て、探偵小說と共に、一部の低級者の要求を滿たすに過ぎざりき。すべてに於いて、寫實主義の大旆は、天下を風靡し、小說は、殆んどこの以外に、何物も無きかの觀を呈せしめたり。この寫實主義の隆盛は、この時代の文學の初期に、更に一時期を劃するものと云ふべし。而して、幾多の新外國文學の飜譯と、紹介とは、漸くその基礎を動かし、その人物の、類型的にして、個性の發揮に缺け、眞人性とは、全然風馬牛なる處、取次に暴露せらるゝに到りて、この一派は、遂に、文壇より遠ざかるに及べり。

寫實主義の衰頽

第一期後期

この寫實主義の缺陷を補足すべく現はれしものは、一種の觀念をその間に寓せむとせる觀念小說なり。心理的描寫を主とせる心理

小說なり。實社會を如實に描寫せむとせる社會小說なり。人生の間の暗黑面を暴露せむとせる深刻小說なり。孰れも、人生と、文藝との溝渠を滿たすべく、努力せりといへども、猶眞の自覺の域に達せず。戲作的態度は、とくに亡失せりといへども、その漫然たる心理的描寫は、未だ社會の新要求を滿足せしむること能はず、而して、また一種幽奥夢幻の境に進む者ありて、前後に動搖し、左右に搖蕩して、その歸著するところを知らざらむとせり。殊に、諸種の文藝的、精神的批評は、屢〻文藝界、思想界に、多大の刺激を與へ、その甲論乙駁は、懷疑的方面と、光明的方面と相錯綜し、交雜して、時に、主情的傾向の隆盛を起し、時に、光明的方面の創作を出し、而して、遂に新寫實主義の興起を促せり。すなはち、自然は自然なり、善ならず惡ならず、美ならず、醜ならず、故に、小說の叙する處、善惡、美醜その任意たるべし、たゝ、讀者をして、その官

新寫實主義の勃興

能が、自然界の現象に感觸するが如く、作中の現象を、明瞭に空想せしむれば足ると云ふもの、その綱領なり。これ、寫實主義の興起の因をなせるものと、相距ること遠からずといへども、殊に、重きを自然描寫に置き、その人物と、動作と、共に有りの儘ならむとし、更に、人生の光明の方面よりも、暗黑の方面を描寫せるところ、意義あり、覺醒あり、大いに前主義の上に出でたり。然れども、根本的自覺に到りては、未だ到らざるところあり。その寫實も、技巧に留まり、心核に入ること淺く、文藝と、人生との間際は、滿たさるゝことなく、依然として存在せり。かくして、舊樣の文藝、藝術を藝術として思考する文藝は、殆んど跡を藏し、當時の新しき小說は、各この新寫實主義、若しくは自然主義の趣を備へ、遂に、自然派文藝の興起を促す前驅をなせり。

以上の趨勢に應じて興起せる自然主義派小說の特色は、專ら客觀

暗黑面の描寫

自然主義の發展

的にして人生の暗黑面を暴露するにあり。人間を靈長的のものとせず、たゞ一個の生物として表現するにあり。故に、當局者は、屢〻これに向つて、禁壓の手を加へたりとはいへども、滔々の勢は、底止するところを知らず。これに反對せる諸種の論議[18]は現はれたりといへども、維新以來起り來りし現實的要求は、こゝに、比較的確實なる到達を見たるを以て、この主義は、今日も、猶多少の變形を以て、覇を文壇に唱へつゝあり。」然れども、これらの小說の寫すところ、餘りに現實的にして、且つ暗黑面に偏し、その敎ふるところ、現代の缺陷、現代人の弱點のみにして、孰れも、急迫の感あり、悠々たる行樂の趣なきを以て、自づから、一部の讀者をして嫌厭の情を起さしめ、相率ゐて、餘裕派小說享樂主義小說[20]に向はしめたり。[19]稱して餘裕派となすものも、自然に立脚して、現實を根柢とすること、猶自然派文藝の如しといへども、依

新浪曼主義

依低回、悠容として逼らず、生死、運命等、生の重要なる大問題に觸れざるものを寫すことに努むるものなり。享樂主義と云ふものも、また自然主義と、多くの扞格を見ず、その寫すところ、歡樂を追究するにありて、いはゆる一種の新しき茶人主義的趣味を發揮するを事とせり。自然主義に慊然たるもの、走りてこれに赴くは、またその自然なるものなり。かくの如くにして、この時代の後期は終り、而して更に、新浪曼主義の下に、新しき活動は起らむとせり。然れども、今日に於いて一般の趣勢の歸嚮するところ、望羊として測知し難し。

(1) 末廣鐵腸等の諸作
(2) 織田純一郎、末松謙澄等の諸譯
(3) 坪内逍遙の作
(4) 二葉亭四迷の作
(5) 尾崎紅葉等の諸作

(6)幸田露伴の諸作
(7)森鷗外、森田思軒等の飜譯
(8)村上浪六等の諸作
(9)川上眉山等の諸作
(10)後藤宙外等の諸作
(11)内田不知庵等の諸作
(12)(13)泉鏡花の諸作
(14)新體詩、新短歌等
(15)中村春雨等の諸作
(16)小杉天外の諸作
(17)小栗風葉、田山花袋、島崎藤村、國木田獨歩、正宗白鳥等の作
(18)後藤宙外等
(19)夏目漱石の諸作
(20)永井荷風の諸作

二　形式

當代の散文の、日露戰役を以て、前後に區別せらるべきは、主として、その内容的方面に據るものなれども、形式的方面よりも、同じく云ふことを得べし。思潮に伴ふ混亂と、錯雜とは、内容に於いてのみにあらず、形式に於いても、また明確に看取するを得べし。美より眞に到る道程は、これによりても、歴々として指點すべし。而して、無自覺的なりしものゝ自覺的に轉移し、人生と、藝術との空虛の除却せられし大事件に在つては、形式も、また多大の影響を蒙り、前古未曾有の轉變、推移を示せるものなり。たゞ、内容の發展の急速なるに比して、その變遷、遲緩にして、常に同一の步調を取ること能はざりしは、注意すべき狀態なりとす。

この時代の最初に於いて、散文の形式の、前代の繼承に留まりしは、

飜譯的口氣

内容に於けるが如し。その淺薄なる内容に伴ふもの、また無自覺にして、低級の技巧に富める形體なるは、自然なればなり。漸くにして、新思潮の勃興し、幾多の政治的小説と、[2]飜譯、飜案小説との出現となりて、文學は、こゝに新しき萠芽を生じたりといへども、新形式は未だ現はれず。たゞ、少しく泰西の文脈を傳へたる飜譯的口氣を受け得たりしのみ。然れども、當時の理想なる傳奇的傾向を寫すには、かくの如きものゝ相應せるを認むるなり。

泰西の思潮來ること愈〻多く、遂に寫實主義の鼓吹は興り、新文藝は、こゝに一大飛躍をなすべき時機に達したりしといへども、形態は、猶舊態を脱すること能はず。新主義を唱道し、新旗幟を樹立せしものといへども、結構の舊樣を脱すること多からざるとともに、その文[3]章は、從來の雅俗折衷に過ぎず。時としては、七五調に轉移せむとして、聲調の爲めに書き、語句の爲めに書き、自然その儘、人生その儘を活寫せむとせしにはあらず。故に、その内容と、形式とは、こゝに多くの齟齬と、矛盾とを生じたるを見る。この齟齬と、矛盾とは、必ずや、根本的に新しき形態に依つて、矯正せられざるべからず。すなはち、内容と全然一致して、その間に、寸隙の乘ずべからざるものならざるべからず。この要求に應じて起りたるは、言文一致の一體なり。抑〻、平安朝以後、言と、文とは、殆んど無關係なり。その考ふるところは、現代的なりと云へども、表現せらるゝに及んでは、忽ち古典的色彩を帶ぶ。時に、談話を寫すに、生語を用ゐるといへども、その範圍にのみ限られ、景を描き、情を叙するに及んでは、專ら過去を師とし、その語の驅使の自在なるを賞す。かくの如きは、少數に限られ、他は、多く語に依つて想を曲げ、句に依つて景を變じて、その所思に忠實なる能はず。思想

言文一致體の現出

新時代語の勢力

と、形態との間の溝渠は、截然として深く、且廣きものあり。たゞ、思潮の轉移、急激ならざりしを以て、この缺陷は、自覺せらるゝこと少なかりしのみ。新時代に入りて、新思想に接す。舊來の語の權威は、忽ち失墜し、新時代語の勢力は、激增せざるを得ず。言文一致の出現は、思想と、表現とを密着し、舊來の弊害を一掃して、猶餘あるものなり。而して、これによつて、新形式は、はじめて新內容に追隨するを得たり。この中に於いて、稍〻敬語を重用せる「です」調と、これに反せる「だ」調との二種相次いで出で、しかも、また「である」調、出でたり。世の喝采は、比較的多く後者に集まりしを以て、後者は、理想的形體となりて、多大の權威を文壇に有するに到れり。然れども、世人は、未だ、悉くこれを謳歌せず。卑俗なり、粗野なりとして、猶舊態の、耳に熟し、目に馴れたるを重んずるもの多かりき。此の故に、さきの雅俗折衷にもあらず、また言文一致にもあらざる一體は出でたり。而して、その淨瑠璃調と、俗語調と、泰西の文脈の符號とを、巧みに混和したるもの、情味多く、含蓄饒かなりしを以て、著しく世の歡迎するところとなれり。これに次いで、當時の歐化主義に對する反動として起りたる國粹主義より

新元祿文體の興起

して、元祿文學は、內容よりも、猶著しく形式に影響して、緊縮せる俳諧體の語句は、頻りに現はれ、奇警と、輕妙と、加ふるに含蓄に於いて、更に世人を驚倒せしめたり。然れども、かくの如きものは、文章のための文章、技巧のための技巧にして、當時の新思想を表現せざるのみならず、また、その主義とするところの寫實の意義にも反するものなり。故に、想と、文との齟齬と、矛盾とは、猶この時に到りても、矯正せらるゝことなくして殘りしなり。而して、この間に於いて、泰西文學の紹介と、飜譯とは、年と共に盛に、譯筆は益〻進歩して、殆んど、各國文學の趣

致を傳へ、聲調をさへ現はし、更に、國文[9]としても、完璧と云ふべきものを出したり。これと共に、新元祿文體は、漸次勢を失ひ、遂に、全く影を藏すに及べり。然れども、寫實主義の興起と、古文學の研鑽に伴へる古文體の復興と、相纏繞せるは、よく當時の思想界の混亂を說明するものと云ふべし。

新元祿文體の衰頽

第一期後期

新元祿文體の倒れて後、文壇の中心は、殆んど、言文一致の領となれり。而して、種々の傾向の、人生と、文藝とを合一せしめむと努力すると共に、この文體は愈〻精緻となり、語句は次第に適切となり、嘗て想到せざりし情緒をさへ、遺憾なく表現するを得るに到れり。その間には、神韻[10]縹緲たらしめむと欲して、幽玄と、奇巧とを主とし、現實を離るゝこと甚だしきものありといへども、全體に於いては、自然にして、しかも、精細なる心理的描寫は、曲盡せられたり。然れども、猶技巧としての興味を固執し、文としての情趣を守りて、未だ、自己のための文、想のための文の域に達せざりき。これに次いで起りし新[11]寫實主義は、自然を、自然の儘に描かむとせしを以て、その結構は、ことに自然なりといへども、其筆、空疎に失し、虛構、誇張の痕跡を存して、猶、藝術至上の傾向を脫せざるものあり。而して、これを過渡期として、漸次、自覺的態度は現はれ、舊式の文體は、悉く掃蕩せらるゝに到れり。

第二期

想と文との合致

日露戰役に伴へる自然主義の興起は、こゝに、前古未曾有の新[12]文體を創造せしめたり。個人の自覺は、技巧としての技巧、文としての文を廢し、自己の爲め、人生の爲めの文を作らしめたり。故に、これより、して、從來の遊戲的分子は、殆んど跡を絕ち、虛構と云ひ、空想と云ふもの、漸く影を收めたり。而して、忌憚なき現實の描寫、無技巧的なる技巧は、世人を動かす事最も深く、人生、社會の缺陷、暗黑面は、遺憾なく讀

者の面前に展開せられて、切迫、急促の感に堪へざらしめたり。然れども、寫實主義以來、存續し來りし內容と、形式との齟齬と、矛盾とは、漸く矯正せられ、想と、文との間の溝渠は、次第に塡充せられ、初めて試作せられたる、純にして又純なる文體は、殆んど渾成せられたり。實に、僅々四十有餘年にして、從來の誇張、虛構、彫琢を斥け、直截、簡明、時代の內面生活を活寫し、人生の眞に向つて突進せるは、驚嘆すべき現象ならずとせむや。此の自然主義派と、多少立脚地を異にせる餘裕派[13]は、その發するところ、餘裕ある文藝の意なりしを以て、辭句も亦、急促の態なく、寬容の致あり。冲澹、閑雅にして、然かも氣品あり、自然を捕捉して、私意を加へず、更に、人生に密着して、これを極寫せしところ、優に、一派の新文體と云ふべし。而して、この文體の淵源は、俳諧より出でし寫生文にありといへども、出づること愈〻遠くして、圓熟の度益〻

結論

總結

加はれり。この以外に於いて、猶享樂派[14]の一流をも見る。艶麗にして雅趣あり、而して、一種寂寥の調を帶べり。然も、自覺したる文體、現實を離れざる形式なることは、前者に同じ。

すべてに於いて、この時代の文學は、その內容に於いて轉換せしと同じく、形式に於いても變化したり。たゞ、その新文學勃興の當初に在りては、猶舊樣に止まりて、新內容に附隨すること能はず。言文一致の一體出づるに及んで、初めて同一の步調を取れり。而して、新寫實主義起り、更に進んで、自然主義の起るに及んで、眞の自覺的境地に入り、想卽文、人卽文の域に達したり。かくの如きもの、前古未だ曾てあらざりしところ、文藝思潮の大旋轉と共に、特筆大書せざるべからざるところに屬す。

顧るに、二千五百七十餘年、期間甚だ長く、出づるところの文學、辭章、

眞に汗牛充棟なりといへども、その中心とするところ、初は情に在り。情極まつて、法に移り、法極まつて道に移り、道極まつて情に移り、而して主義に移れり。その目的とするところ、初は美に在り、美極まつて眞に移れり。而して、その間に、幾時代を經て蘊釀せる一黃金時代あれば、統一の時代あり、統一して遺漏なく、徒に補綴するに到れば、また極まつて新機運を生じ、新思潮を起し、新黃金時代を現出す。極まれば通じ、通ずれば極まる、宛然として流水の如し、崖に逢うて淵となり、巖を超えて瀨となる、しかも、流に隨つて行かば、すなはち海に到るべし。わが國文學の水、蓄積して海となり、汪洋として辭藻の波を揚げ、思想の潮を湧かす、或は遠きにあらざるべし。吾人は、生前に於いて、この新々黃金時代に遭遇せむことを、切望して止まざるなり。

(1) 末廣鐵腸等の諸作
(2) 織田純一郎、末松謙澄等の諸飜譯
(3) 坪內逍遙の作
(4) 山田美妙齋の諸作
(5) 二葉亭四迷の諸作
(6) (7) 尾崎紅葉の諸作
(8) 尾崎紅葉、幸田露伴の諸作
(9) 森鷗外の飜譯
(10) 泉鏡花の諸作
(11) 小杉天外の諸作
(12) 田山花袋、島崎藤村、國木田獨步、正宗白鳥等の諸作
(13) 夏目漱石の諸作
(14) 永井荷風の諸作

日本文學新史終

日本文學新史索引

あ

赤本　二三九
押韻　二七八
安永天明時代　一七八

い

幽閑的趣味　一三九
遊戯的境地　二六三
遊戯的態度　二八五
遊戯的分子　三〇五
幽玄　一〇四、一一〇、一一五、一三〇、一四〇、一四一、一八四、一八五、一八六、一八七、一九四、一九六
優美の文學　二五
遊里文學　二八、二三五、一三〇
幽靈能　一四一

意志　一八、一九、一〇三、一一一、一一二
意志的傾向　一一五
意志の尊重　九三、一二九
意志の文學　九四、九六
因果律　二三九
因襲的興味　二八五
印度思想　九、五四
印度傳說　七九
引喩　八九、九〇、一〇九、一二一、一六一、一六四

う

浮世草子　二八、二九、三〇、三二、三三、二三四、二三六、二三七、二三九、二九一
歌傳說の物語　八〇

え

英文學　一九一
謠曲　二三九、一四四、一四六、一五一、一五五、一五九、一六〇、一六二、一六三、一八八、二〇三
江戸氣質　一九四、一九五、一九六、一九八、二〇〇
江戸座　一九四
江戸趣味　二〇〇、二〇九、二二一
江戸的氣風　二三九
延喜以前の時代　六五
緣語　七五、七四、七五、七六、一〇八、一四七、一五〇、一六四、二〇二、二〇三、二〇七

お

御伽草子　一六五、一八八、二一七、二二九、二三五
歐化主義　二二四、二六四、二六五、二八七、二九〇、二九一、二九二、三〇三

か

梗概的紹介 二九二
歌謠 七、二四、二五、二七
客觀的態度 四五、六七、六八、六九、一九六
樂劇 二七三、二八三
革新運動 二九一
革新詩 二七七
格調論 二七九
懸詞 三三、四九、七三、七五、七六、八七、一〇九、一四七、一五〇、一六四、二〇二、二〇三、二〇七、二一〇、二三九
雅俗折衷 三〇〇、三〇二
片假名 三九
氣質物 二三一
家庭の物語 八一、八二
假名草子 二二七、二二八、二三七
合卷物 二三〇、二四四
神 二三
漢學 三九、四〇、六二、六三、六四、六六、九六、九七、一七四、一七六、二三八、二四六
漢詩 二〇三、二一一
漢詩文 七、三八、六六
感情 一一、一八、一九、五八、六〇、九一、一一二、一一三、一七三
感情中心時代 二〇
感情の尊重 五九、六〇、六七、九三、二三九
感情の文學 九四
漢文 六、七、五三
漢文脈 一二〇、一二三、一二四

き

舊形式 二七六
舊散文 一一五
舊趣味の統一 一〇三
舊短歌 二七四
舊文學 九四、九七、一〇三、一〇四、一〇九、一一二、一一三、一二三、一四八、一七一
舊文藝 二五九、二六〇
技巧的傾向 一九八
擬合戰記 一五八、一六五
戲曲 二七三
擬古的傾向 二六五
擬古派 二六九、二八一
貴族趣味 一五一
貴族文學 一七二
○黄表紙 二三〇、二三九
近代的思想 二七四
狂言 一四一、一四三、一四四、一四八、一五〇、一五一、一五七、一六六
享樂主義 二八九、二九七
享樂主義小說 二九六
享樂主義派 二五九
享樂的氣分 二二四
享樂的思想 二三〇
享樂的趣味 二三二
狂歌 五、一九五、一九九、二〇九、二二〇、二二四、二七四
脚本 一九七、二〇〇、二二二、二二五、二六六、二六七、二七二、二七四、二七九、二八三、二八五
虛僞の型 一〇三
虛無思想 一五六

く

空想的 二五七、二五八、二九〇、二九二
公卿社會 一七〇
公卿道 一八、一七三、一七四
臭草紙 二三三
軍記物語 八五、一五二、二三八、二四一
基督教 二五三
黑本 二三九
懷疑的方向 二九四
外形的寫實 二九二
外來思想 四五、四六
光明的方面 二九四
過渡期 二六〇
勸善懲惡 一七五、一七六、二三〇、二三四、二三九
勸善懲惡主義 二三〇、二三三、二四七、二九一 二八九
觀念小說 二九三

け

傾向文學 九一、九六、一九八
警句 二三五
形式的革新 二七八
藝術 二五九
藝術至上主義 三〇五
藝術的 二五七
藝術的傾向 二八九
教訓 一一五、二三四、二三三
戲作的態度 二九四
衒學的 一三三、一五七、一六二、一六四
衒學的傾向 二四六
衒學的口氣 二四三
衒學的臭味 二四六
衒學的時代 二四五
衒學の風 二三五
現實 二五四、二五七、二五八、二五九、二六〇、二七〇、二七二、二七三、二七四、二九〇、三〇五
現實主義 二五三、二五四、二八九、二九〇
現實主義的傾向 二六六
現實的 二五二、二五三、二九三、二九六
現實的要求 二九六
現實的傾向 二五六、二七三、二八三、二八五
現實的生活 二五七
現實的態度 二六二
現實の文學 二五九
現代主義 一五一、一五九、一七七
現代的 二一一、二二二、三〇一
現代的傾向 一五七、一五八、一六五、一六六、二二五、二四一
現代的思潮 一五七
現代的文藝 一三三
言文一致 三〇一、三〇二、三〇三、三〇四、三〇七
元祿以前 一七八

元祿時代 一七八

こ

固有思想 四四、四六、五四、六三
口語 二八四
口語體の詩 二八四
口語の詩 二七三
功利中心主義 二八九
國學 二三八
國粹主義 二六六、二七九、二九一、三〇三
國粹保存主義 二五四、二六五、二七八、二八五
國文脈 一三〇、一三三、一三四
國民文學 九九、一一五
國民の自覺 五七、二五七
國民の特性 三、四
誇張 三三、一六五
滑稽本 一三〇、一三四
古典主義 一五一、一五九、一七六、二二四
古典的 二二一、二二三、二八四
古典的傾向 一三四、二二四、二三八、二四〇、二四一
古典的形式 二三七、二三八、二八五
古典的語句 一三三
古典的修養 一四〇
古典的色彩 三〇一
古典的趣味 一四〇、一九七
古典的叙事詩 二七一、二八八
古典的知識 一三六
古典的流派 二一五
個人主義 二五五、二五六
個人性 二六〇
個人的價値 一五八
個人の價値 二
個人の權威 二五八
個人の自覺 三〇五
個人の發揮 二七四、二九三
古淨瑠璃 一八八、二〇五
個性發展的思想 二五八
古風 一八一、一八二、一八三、一八四
根本的革新 一八六、二〇三、二〇四、二三四
根本的自覺 二九五

さ

創始期 二六〇
寂 一八四、二〇五
三句切 七二、七三

し

自由民權 二八九
秀句 七六
自覺的 二九九
自覺的境地 二七〇、三〇七
自覺的態度 一七七、一七八、二六二
二八四、二八六、三〇五
自我の實現 二七四
自我の發展 二五八
色彩的觀念 六九

史劇 二七二
自然讃美の文學 八
自然主義 一五、一七、二五八、二七三、二八四、
二八六、二九五、二九七、三〇五、三〇七
自然主義全盛期 二六一
自然主義的象徵詩 二七三
自然主義派 三〇六
自然主義派小說 二九五
自然派文學 二六〇
自然派文藝 二九五、二九六
自然描寫 二九五
自然文學 八
時代思潮 二六二、二八八
時代物 一八八、一九〇、二〇五、二〇六
七五調 一三五、二四三、二七八、二七九、二八一、三〇〇
實社會 二九四
支那思想 六、九、五四
支那傳說 七六、八一
眞 一七、一八、二五三、二八八、二九九、三〇八
眞人性 二六〇
新樂劇 二七二、二七四
新技巧 二八三
新脚本 二六六
新傾向 二五九、二六七、二七四、二八五
新形式 一〇六、一一六、一一七、一一八
二八〇、三〇〇、三〇三
神嚴の文學 二五
新元祿文體 三〇四
深刻小說 二九四
新古典趣味 一九六
眞言 六三
新散文 九〇、九一、一一五、一二六、一六〇
二二八、二二九、二七七、二九〇
新猿樂 一三九、一四一
新詩歌 二六六、二六七
新思想 一一七、一一八
新時代思潮 二八五
新思潮 三〇〇
新々黃金時代 三〇八
新淨瑠璃 一八八、一八九
新寫實主義 二五六、二六〇、二九四、二九五、三〇五
新趣味 一三〇、一五二
人生 二五八、二五九、二六六、二八八、二九五、二九九
人生問題 二五三
人生文學 七
新體詩 二六二、二六四、二六五、二六七、二六八、二七〇
二七二、二七三、二七六、二七七、二八〇、二八一、二八二
新短歌 二八〇、二八二
新日本思想 五六、六四、七九、九一
新日本文學 九七
眞の文學 二五一、二五九
新派 七一、七六
新俳諧 一八二、一八六、二一一
新舞曲 一三三
新佛法 九五、一一四、一二七、一二九、一五一
新佛法思想 一一四
新文學 九四、九八、一〇一、一〇三、一〇四、一〇九、

新文藝 一一〇、一一一、一一三、一一四、一一六、一七一、二五九、二六〇、二八五、二九一、二七四、三〇〇
新文藝思想 二五八
新文藝主義 二九〇
新文章 二三七
新文明 二六三
○新飜譯脚本 二七九
心理小說 一九四
心理的解剖 二九三
心理的描寫 二九三、二九四、三〇四
新浪曼主義 二五九、二九七
新歷史 八五
新黄金時代 三〇八
新韻文 六六、一三九、二七七、二八四、二八五
情 三〇八
情中心時代 二〇
象徵 二八〇
象徵詩 二七一、二八二
象徵詩的傾向 二八二
象徵主義 二五七、二八五
情熱的傾向 二七一
情の文學 二四七
淨瑠璃 一六六、一八七、一八八、一九七、二〇〇、二一三、二一九、二三〇、二三〇、二四四
社會劇 一八八、二〇五
社會小說 二九四
寫實 二九五
寫實主義 一五、二五四、二五五、二五六、二六〇、二六六、二七九、二九〇、二九一、二九三、二九五、三〇〇、三〇五
寫實主義的 二五五
寫實主義全盛期 二六〇
寫實的 八〇、二七二
寫實的傾向 二四〇、二五四、二六七、二六九、二九一
寫生文 三〇六
洒落本 二三三、二三〇、二三九
主義 三〇八
主義の時代 二〇
宿命說 六三、八五、二三九
主觀的傾向 二五六
主觀的態度 四五、六七、六八、一九六
主情的 二八一
主情的傾向 二五四、二五五、二五六、二七〇、二八一、二九四
主情派韻文 二六六
儒道 六、一三、一五、四五、一四三、一七四、一七五、一七六、一七八、一八七、二一九、二三九
儒道主義 一九〇、二二四
儒道中心 一三二、一八七
儒道中心時代 二〇
儒道的教訓 一七五、二三一
儒道的精神 二三三
儒道的道德 二三四
純客觀的態度 六九
純擬古調 二七八
純正の文學 二三一

純日本思想 四二、四三、一九四
序詞 三三、四九、五一、五三、七二、七三、七四、一〇八
四六文 八七、九七
四六文體 一一八、一二〇、一二一

す

宿世 六三、八三
粹 一七七、二三三、二四〇
瑞祥 四一、五四

せ

世紀末的懷疑思想 二五八
世紀末的思想 二七二、二八三
生語 一四八、一四九、一五〇、一六五、一七七、一八一、二〇四、二〇五、二〇九、二四〇、二八四、二八五、三〇一
精神的傾向 二八九
精神的方面 二九二
政治思想 二五三
政治的小說 三〇〇
政治熱 二八九
消極的傾向 八
小說 一五、一六、二七三、二八八、二八九、二九一、二九二、二九三、二九四、二九六
蕉風 一八四、一八五、一九二、一九六、二六九
積極的傾向 九
戰國時代 一三五
禪的趣味 一三九
禪味 一八六
宣命 五三
川柳 一九六、二〇〇、二二三、二二五、二七四
臺辭 二八三
世話物 一八八、一九〇、一九一、一九二、二〇五

そ

俗謠 二八四
卽興的趣味 五三

た

對偶 一一九、一二〇、一六一
對照 八九
道教 四〇
脫俗的氣風 一三四
「だ」調 三〇三
道德的態度 二三〇、二三三
短歌 一三、一三、一四、一五、一六、三五、五二、六一、六三、六七、七三、八三、一三六、一三八、一四四、一五〇、一六三、一八三、一八六、一九四、一九五、二〇三、二〇三、二〇四、二〇七、二〇八、二〇九、二一〇、二二三、二五六、二六三、二六七、二六八、二七〇、二七四、二七七、二七九、二八〇、二八四
短歌中心の傳說 八〇
短歌傳說の物語 八一、八三、八六
短歌の物語 八一
男女文學の調和 九七
探偵小說 二九三
單文 八六、八七、一三三
談林 一八四、一八六、二〇三、二〇四、二三四

談林派　一八二
達磨風　一〇四
長歌　五一、六一、二〇九

つ

通　二三三、二四〇
對句　三一、四八、五〇、五一、五二、五五、七二

て

「である」調　三〇二
嘲笑的氣質　一三〇
超自然的　二五七
「です」調　三〇二
哲學的　二七〇
傳奇小説　二九三
傳奇的　二九〇
傳奇的傾向　三〇〇
天才主義　二五五、二五六
天台　六二
天平以後の時代　四三
天平以前の時代　四三
天平時代　四三
天明調　一九五

と

童謠　二八
統一的傾向　一三二、一三六、一三八、一四四、一四六、一四七、一四八、一五三、一六三、一六六、二三九
統一的美　二四二
統一的流派　七一
統一主義　一六〇
統一の時代　三〇八

な

南北朝時代　一三五

に

日記　八一
匂　一八四、二〇五
人情本　二三一、二四四

の

祝詞　二三、二八、五三

は

俳諧　一八二、一八三、一八四、一九四、一九九、二〇四、二〇七、二〇八、二一〇、二一二、二一三、二一五、二一七、二一八、二二〇、二二四、二二五、二二六、二三七、二六三、二六八、二七七、二七九、二八〇
俳諧體　一四九
俳諧的興味　二六八
俳諧連歌　一四一、一四六、一五一、一八〇、二〇三
配合　二一一
俳句　二八〇、二八三、二八五
八文字屋本　二三一、二三七、二三九
法　三〇八
反抗的態度　四五、四六、五〇

反道德態度　一七六、二二〇、二二三
反道德的思想　二二〇
半俗半僧主義　一五七
反覆　三一、五五

ひ

美　一六、一七、一八、六〇、二五一、二六八、二九九、三〇八
悲觀的傾向　六三、六八
非藝術的　二六六
非現實的　二五二、二九〇
非現實的態度　二六二
非古典主義　一四八、一五七、二二四
非古典趣味　一四〇
美的生活　二五五
美の希求　五九、六〇、六七、九一、一三九、一七三
美の文學　二五一、二五八
響　一八四、二〇五
譬喩　二五、三〇、四七、五一、五四、七二、七五、七六、八八、九〇、一〇七、二四三
平假名　三九

ふ

復古の氣運　一七六、一九四、一九五、一九六、一九七、二一〇、二一一
復古の氣風　二一三
復古の風　一九三、二一三
複文　八七
武士社會　一七〇
武士道　一八、九四、一二七、一七三、一七四、一七八
武士道の經典　九六
藤原氏全盛時代　六五
物實主義　二五二、二五三
物質的　二五三
佛法　九、一〇、一一、一二、一五、三九、六一、六三、六四、六六、一三二、一六九、二二九、二三九
佛法思想　四六、一四一、一五三
佛法趣味　一五三
佛法宣傳の文學　九六
佛法中心思想　九七
佛法中心時代　二〇
佛法的教訓　一五八、一七五、二五一
佛法的美術　三八
佛法文學　一四三
佛法の説教　一三一
佛法の大説教　一五五、一五六
佛文學　二八三
普汎的趣味　二六八
文學批評の法　二九二
文化文政時代　一七八
文藝主義中心時代　二〇
文藝思潮　三〇七
佛蘭西文學　二五七

へ

平民社會　一七〇
平民趣味　一五一
平民道　一九、一七三、一七四、一七八

平民的意氣　二四
平民的氣質　一八〇
平民的氣風　一四八、二〇八
平民的思想　一四八、二〇〇
平民的趣味　一三一、一八六
平民的文學　一三一
平民の時代　一六八
平民文學　一三一、一四九、一五九、一六六、一七二、一七三

ほ

變轉的趣味　一三八
保守主義者　二六四
補綴的傾向　一三一、一五九、一四八、一六一、一六六
細ム　一八一、二〇五
蹶案　二五〇
本地物　二三五
本能滿足說　二三五
飜譯　二二八、二五〇、二五二、二五九、三〇三

ま

無自覺　二五二
夢幻劇的傾向　二六七
無技巧的描寫　九、一一七、一三一、一五九
無解決的思想　二五八
無ひ

む

道行文　二〇五
道の文學　二四七
道　三〇八
御歌所派　二六七

み

萬葉假名　三五
枕詞　三一、二四、二九、三〇、三八、三一、三三、三七、三三

ま

蹶躓脚本　二六七、二七二
蹶躓的口氣　三〇〇
蹶躓蹶案小說　三〇〇

ま

無自覺的　二五九、三〇〇
無自覺的運動　二三三
無自覺的態度　二六一、二六六
室町幕府全盛時代　一三五

め

客觀的　二三〇、二八一

も

模倣文學　二二七

よ

讀本　二二一、二二二、二二四、二二五、二二六、二二七、二二八、二二九、二三〇、二三一、二三二、二三三、二三四、二三五、二三六、二三七、二三八、二三九、二四〇、二四一、二四二、二四三、二四四、二四五、二四六、二四七、二四八、二四九、二五〇、二五一、二五二、二五三、二五四、二五五、二五六、二五七、二五八、二五九、二六〇、二六一、二六二、二六三、二六四、二六五、二六六、二六七、二六八、二六九、二七〇、二七一、二七二、二七三、二七四、二七五、二七六、二七七、二七八、二七九、二八〇、二八一、二八二、二八三、二八四、二八五、二八六、二八七、二八八、二八九、二九〇、二九一、二九二、二九三、二九四、二九五、二九六、二九七、二九八、二九九、三〇〇、三〇一、三〇二、三〇三、三〇四、三〇五、三〇六、三〇七、三〇八、三〇九、三一〇、三一一、三一二、三一三、三一四、三一五、三一六、三一七、三一八、三一九、三二〇、三二一、三二二、三二三、三二四、三二五、三二六、三二七、三二八、三二九、三三〇、三三一、三三二、三三三、三三四、三三五、三三六、三三七、三三八、三三九、三四〇、三四一、三四二、三四三、三四四、三四五、三四六、三四七、三四八、三四九、三五〇、三五一、三五二、三五三、三五四、三五五、三五六、三五七、三五八、三五九、三六〇、三六一、三六二、三六三、三六四、三六五、三六六、三六七、三六八、三六九、三七〇、三七一、三七二、三七三、三七四、三七五、三七六、三七七、三七八、三七九、三八〇、三八一、三八二、三八三、三八四、三八五、三八六、三八七、三八八、三八九、三九〇、三九一、三九二、三九三、三九四、三九五、三九六、三九七、三九八、三九九、四〇〇、四〇一、四〇二、四〇三、四〇四、四〇五、四〇六、四〇七、四〇八、四〇九、四一〇、四一一、四一二、四一三、四一四、四一五、四一六、四一七、四一八、四一九、四二〇、四二一、四二二、四二三、四二四、四二五、四二六、四二七、四二八、四二九、四三〇、四三一、四三二、四三三、四三四、四三五、四三六、四三七、四三八、四三九、四四〇、四四一、四四二、四四三、四四四、四四五、四四六、四四七、四四八、四四九、四五〇、四五一、四五二、四五三、四五四、四五五、四五六、四五七、四五八、四五九、四六〇、四六一、四六二、四六三、四六四、四六五、四六六、四六七、四六八、四六九、四七〇、四七一、四七二、四七三、四七四、四七五、四七六、四七七、四七八、四七九、四八〇、四八一、四八二、四八三、四八四、四八五、四八六、四八七、四八八、四八九、四九〇、四九一、四九二、四九三、四九四、四九五、四九六、四九七、四九八、四九九、五〇〇、五〇一、五〇二、五〇三、五〇四、五〇五、五〇六、五〇七、五〇八、五〇九、五一〇、五一一、五一二、五一三、五一四、五一五、五一六、五一七、五一八、五一九、五二〇、五二一、五二二、五二三、五二四、五二五、五二六、五二七、五二八、五二九、五三〇、五三一、五三二、五三三、五三四、五三五、五三六、五三七、五三八、五三九、五四〇、五四一、五四二、五四三、五四四、五四五、五四六、五四七、五四八、五四九、五五〇、五五一、五五二、五五三、五五四、五五五、五五六、五五七、五五八、五五九、五六〇、五六一、五六二、五六三、五六四、五六五、五六六、五六七、五六八、五六九、五七〇、五七一、五七二、五七三、五七四、五七五、五七六、五七七、五七八、五七九、五八〇、五八一、五八二、五八三、五八四、五八五、五八六、五八七、五八八、五八九、五九〇、五九一、五九二、五九三、五九四、五九五、五九六、五九七、五九八、五九九、六〇〇、六〇一、六〇二、六〇三、六〇四、六〇五、六〇六、六〇七、六〇八、六〇九、六一〇、六一一、六一二、六一三、六一四、六一五、六一六、六一七、六一八、六一九、六二〇、六二一、六二二、六二三、六二四、六二五、六二六、六二七、六二八、六二九、六三〇、六三一、六三二、六三三、六三四、六三五、六三六、六三七、六三八、六三九、六四〇、六四一、六四二、六四三、六四四、六四五、六四六、六四七、六四八、六四九、六五〇、六五一、六五二、六五三、六五四、六五五、六五六、六五七、六五八、六五九、六六〇、六六一、六六二、六六三、六六四、六六五、六六六、六六七、六六八、六六九、六七〇、六七一、六七二、六七三、六七四、六七五、六七六、六七七、六七八、六七九、六八〇、六八一、六八二、六八三、六八四、六八五、六八六、六八七、六八八、六八九、六九〇、六九一、六九二、六九三、六九四、六九五、六九六、六九七、六九八、六九九、七〇〇、七〇一、七〇二、七〇三、七〇四、七〇五、七〇六、七〇七、七〇八、七〇九、七一〇、七一一、七一二、七一三、七一四、七一五、七一六、七一七、七一八、七一九、七二〇、七二一、七二二、七二三、七二四、七二五、七二六、七二七、七二八、七二九、七三〇、七三一、七三二、七三三、七三四、七三五、七三六、七三七、七三八、七三九、七四〇、七四一、七四二、七四三、七四四、七四五、七四六、七四七、七四八、七四九、七五〇、七五一、七五二、七五三、七五四、七五五、七五六、七五七、七五八、七五九、七六〇、七六一、七六二、七六三、七六四、七六五、七六六、七六七、七六八、七六九、七七〇、七七一、七七二、七七三、七七四、七七五、七七六、七七七、七七八、七七九、七八〇、七八一、七八二、七八三、七八四、七八五、七八六、七八七、七八八、七八九、七九〇、七九一、七九二、七九三、七九四、七九五、七九六、七九七、七九八、七九九、八〇〇、八〇一、八〇二、八〇三、八〇四、八〇五、八〇六、八〇七、八〇八、八〇九、八一〇、八一一、八一二、八一三、八一四、八一五、八一六、八一七、八一八、八一九、八二〇、八二一、八二二、八二三、八二四、八二五、八二六、八二七、八二八、八二九、八三〇、八三一、八三二、八三三、八三四、八三五、八三六、八三七、八三八、八三九、八四〇、八四一、八四二、八四三、八四四、八四五、八四六、八四七、八四八、八四九、八五〇、八五一、八五二、八五三、八五四、八五五、八五六、八五七、八五八、八五九、八六〇、八六一、八六二、八六三、八六四、八六五、八六六、八六七、八六八、八六九、八七〇、八七一、八七二、八七三、八七四、八七五、八七六、八七七、八七八、八七九、八八〇、八八一、八八二、八八三、八八四、八八五、八八六、八八七、八八八、八八九、八九〇、八九一、八九二、八九三、八九四、八九五、八九六、八九七、八九八、八九九、九〇〇、九〇一、九〇二、九〇三、九〇四、九〇五、九〇六、九〇七、九〇八、九〇九、九一〇、九一一、九一二、九一三、九一四、九一五、九一六、九一七、九一八、九一九、九二〇、九二一、九二二、九二三、九二四、九二五、九二六、九二七、九二八、九二九、九三〇、九三一、九三二、九三三、九三四、九三五、九三六、九三七、九三八、九三九、九四〇、九四一、九四二、九四三、九四四、九四五、九四六、九四七、九四八、九四九、九五〇、九五一、九五二、九五三、九五四、九五五、九五六、九五七、九五八、九五九、九六〇、九六一、九六二、九六三、九六四、九六五、九六六、九六七、九六八、九六九、九七〇、九七一、九七二、九七三、九七四、九七五、九七六、九七七、九七八、九七九、九八〇、九八一、九八二、九八三、九八四、九八五、九八六、九八七、九八八、九八九、九九〇、九九一、九九二、九九三、九九四、九九五、九九六、九九七、九九八、九九九、一〇〇〇、一〇〇一、一〇〇二、一〇〇三、一〇〇四、一〇〇五、一〇〇六、一〇〇七、一〇〇八、一〇〇九、一〇一〇、一〇一一、一〇一二、一〇一三、一〇一四、一〇一五、一〇一六、一〇一七、一〇一八、一〇一九、一〇二〇、一〇二一、一〇二二、一〇二三、一〇二四、一〇二五、一〇二六、一〇二七、一〇二八、一〇二九、一〇三〇、一〇三一、一〇三二、一〇三三、一〇三四、一〇三五、一〇三六、一〇三七、一〇三八、一〇三九、一〇四〇、一〇四一、一〇四二、一〇四三、一〇四四、一〇四五、一〇四六、一〇四七、一〇四八、一〇四九、一〇五〇、一〇五一、一〇五二、一〇五三、一〇五四、一〇五五、一〇五六、一〇五七、一〇五八、一〇五九、一〇六〇、一〇六一、一〇六二、一〇六三、一〇六四、一〇六五、一〇六六、一〇六七、一〇六八、一〇六九、一〇七〇、一〇七一、一〇七二、一〇七三、一〇七四、一〇七五、一〇七六、一〇七七、一〇七八、一〇七九、一〇八〇、一〇八一、一〇八二、一〇八三、一〇八四、一〇八五、一〇八六、一〇八七、一〇八八、一〇八九、一〇九〇、一〇九一、一〇九二、一〇九三、一〇九四、一〇九五、一〇九六、一〇九七、一〇九八、一〇九九、一一〇〇、一一〇一、一一〇二、一一〇三、一一〇四、一一〇五、一一〇六、一一〇七、一一〇八、一一〇九、一一一〇、一一一一、一一一二、一一一三、一一一四、一一一五、一一一六、一一一七、一一一八、一一一九、一一二〇、一一二一、一一二二、一一二三、一一二四、一一二五、一一二六、一一二七、一一二八、一一二九、一一三〇、一一三一、一一三二、一一三三、一一三四、一一三五、一一三六、一一三七、一一三八、一一三九、一一四〇、一一四一、一一四二、一一四三、一一四四、一一四五、一一四六、一一四七、一一四八、一一四九、一一五〇、一一五一、一一五二、一一五三、一一五四、一一五五、一一五六、一一五七、一一五八、一一五九、一一六〇、一一六一、一一六二、一一六三、一一六四、一一六五、一一六六、一一六七、一一六八、一一六九、一一七〇、一一七一、一一七二、一一七三、一一七四、一一七五、一一七六、一一七七、一一七八、一一七九、一一八〇、一一八一、一一八二、一一八三、一一八四、一一八五、一一八六、一一八七、一一八八、一一八九、一一九〇、一一九一、一一九二、一一九三、一一九四、一一九五、一一九六、一一九七、一一九八、一一九九、一二〇〇、一二〇一、一二〇二、一二〇三、一二〇四、一二〇五、一二〇六、一二〇七、一二〇八、一二〇九、一二一〇、一二一一、一二一二、一二一三、一二一四、一二一五、一二一六、一二一七、一二一八、一二一九、一二二〇、一二二一、一二二二、一二二三、一二二四、一二二五、一二二六、一二二七、一二二八、一二二九、一二三〇、一二三一、一二三二、一二三三、一二三四、一二三五、一二三六、一二三七、一二三八、一二三九、一二四〇、一二四一、一二四二、一二四三、一二四四、一二四五、一二四六、一二四七、一二四八、一二四九、一二五〇、一二五一、一二五二、一二五三、一二五四、一二五五、一二五六、一二五七、一二五八、一二五九、一二六〇、一二六一、一二六二、一二六三、一二六四、一二六五、一二六六、一二六七、一二六八、一二六九、一二七〇、一二七一、一二七二、一二七三、一二七四、一二七五、一二七六、一二七七、一二七八、一二七九、一二八〇、一二八一、一二八二、一二八三、一二八四、一二八五、一二八六、一二八七、一二八八、一二八九、一二九〇、一二九一、一二九二、一二九三、一二九四、一二九五、一二九六、一二九七、一二九八、一二九九、一三〇〇、一三〇一、一三〇二、一三〇三、一三〇四、一三〇五、一三〇六、一三〇七、一三〇八、一三〇九、一三一〇、一三一一、一三一二、一三一三、一三一四、一三一五、一三一六、一三一七、一三一八、一三一九、一三二〇、一三二一、一三二二、一三二三、一三二四、一三二五、一三二六、一三二七、一三二八、一三二九、一三三〇、一三三一、一三三二、一三三三、一三三四、一三三五、一三三六、一三三七、一三三八、一三三九、一三四〇、一三四一、一三四二、一三四三、一三四四、一三四五、一三四六、一三四七、一三四八、一三四九、一三五〇、一三五一、一三五二、一三五三、一三五四、一三五五、一三五六、一三五七、一三五八、一三五九、一三六〇、一三六一、一三六二、一三六三、一三六四、一三六五、一三六六、一三六七、一三六八、一三六九、一三七〇、一三七一、一三七二、一三七三、一三七四、一三七五、一三七六、一三七七、一三七八、一三七九、一三八〇、一三八一、一三八二、一三八三、一三八四、一三八五、一三八六、一三八七、一三八八、一三八九、一三九〇、一三九一、一三九二、一三九三、一三九四、一三九五、一三九六、一三九七、一三九八、一三九九、一四〇〇、一四〇一、一四〇二、一四〇三、一四〇四、一四〇五、一四〇六、一四〇七、一四〇八、一四〇九、一四一〇、一四一一、一四一二、一四一三、一四一四、一四一五、一四一六、一四一七、一四一八、一四一九、一四二〇、一四二一、一四二二、一四二三、一四二四、一四二五、一四二六、一四二七、一四二八、一四二九、一四三〇、一四三一、一四三二、一四三三、一四三四、一四三五、一四三六、一四三七、一四三八、一四三九、一四四〇、一四四一、一四四二、一四四三、一四四四、一四四五、一四四六、一四四七、一四四八、一四四九、一四五〇、一四五一、一四五二、一四五三、一四五四、一四五五、一四五六、一四五七、一四五八、一四五九、一四六〇、一四六一、一四六二、一四六三、一四六四、一四六五、一四六六、一四六七、一四六八、一四六九、一四七〇、一四七一、一四七二、一四七三、一四七四、一四七五、一四七六、一四七七、一四七八、一四七九、一四八〇、一四八一、一四八二、一四八三、一四八四、一四八五、一四八六、一四八七、一四八八、一四八九、一四九〇、一四九一、一四九二、一四九三、一四九四、一四九五、一四九六、一四九七、一四九八、一四九九、一五〇〇、一五〇一、一五〇二、一五〇三、一五〇四、一五〇五、一五〇六、一五〇七、一五〇八、一五〇九、一五一〇、一五一一、一五一二、一五一三、一五一四、一五一五、一五一六、一五一七、一五一八、一五一九、一五二〇、一五二一、一五二二、一五二三、一五二四、一五二五、一五二六、一五二七、一五二八、一五二九、一五三〇、一五三一、一五三二、一五三三、一五三四、一五三五、一五三六、一五三七、一五三八、一五三九、一五四〇、一五四一、一五四二、一五四三、一五四四、一五四五、一五四六、一五四七、一五四八、一五四九、一五五〇、一五五一、一五五二、一五五三、一五五四、一五五五、一五五六、一五五七、一五五八、一五五九、一五六〇、一五六一、一五六二、一五六三、一五六四、一五六五、一五六六、一五六七、一五六八、一五六九、一五七〇、一五七一、一五七二、一五七三、一五七四、一五七五、一五七六、一五七七、一五七八、一五七九、一五八〇、一五八一、一五八二、一五八三、一五八四、一五八五、一五八六、一五八七、一五八八、一五八九、一五九〇、一五九一、一五九二、一五九三、一五九四、一五九五、一五九六、一五九七、一五九八、一五九九、一六〇〇、一六〇一、一六〇二、一六〇三、一六〇四、一六〇五、一六〇六、一六〇七、一六〇八、一六〇九、一六一〇、一六一一、一六一二、一六一三、一六一四、一六一五、一六一六、一六一七、一六一八、一六一九、一六二〇、一六二一、一六二二、一六二三、一六二四、一六二五、一六二六、一六二七、一六二八、一六二九、一六三〇、一六三一、一六三二、一六三三、一六三四、一六三五、一六三六、一六三七、一六三八、一六三九、一六四〇、一六四一、一六四二、一六四三、一六四四、一六四五、一六四六、一六四七、一六四八、一六四九、一六五〇、一六五一、一六五二、一六五三、一六五四、一六五五、一六五六、一六五七、一六五八、一六五九、一六六〇、一六六一、一六六二、一六六三、一六六四、一六六五、一六六六、一六六七、一六六八、一六六九、一六七〇、一六七一、一六七二、一六七三、一六七四、一六七五、一六七六、一六七七、一六七八、一六七九、一六八〇、一六八一、一六八二、一六八三、一六八四、一六八五、一六八六、一六八七、一六八八、一六八九、一六九〇、一六九一、一六九二、一六九三、一六九四、一六九五、一六九六、一六九七、一六九八、一六九九、一七〇〇、一七〇一、一七〇二、一七〇三、一七〇四、一七〇五、一七〇六、一七〇七、一七〇八、一七〇九、一七一〇、一七一一、一七一二、一七一三、一七一四、一七一五、一七一六、一七一七、一七一八、一七一九、一七二〇、一七二一、一七二二、一七二三、一七二四、一七二五、一七二六、一七二七、一七二八、一七二九、一七三〇、一七三一、一七三二、一七三三、一七三四、一七三五、一七三六、一七三七、一七三八、一七三九、一七四〇、一七四一、一七四二、一七四三、一七四四、一七四五、一七四六、一七四七、一七四八、一七四九、一七五〇、一七五一、一七五二、一七五三、一七五四、一七五五、一七五六、一七五七、一七五八、一七五九、一七六〇、一七六一、一七六二、一七六三、一七六四、一七六五、一七六六、一七六七、一七六八、一七六九、一七七〇、一七七一、一七七二、一七七三、一七七四、一七七五、一七七六、一七七七、一七七八、一七七九、一七八〇、一七八一、一七八二、一七八三、一七八四、一七八五、一七八六、一七八七、一七八八、一七八九、一七九〇、一七九一、一七九二、一七九三、一七九四、一七九五、一七九六、一七九七、一七九八、一七九九、一八〇〇、一八〇一、一八〇二、一八〇三、一八〇四、一八〇五、一八〇六、一八〇七、一八〇八、一八〇九、一八一〇、一八一一、一八一二、一八一三、一八一四、一八一五、一八一六、一八一七、一八一八、一八一九、一八二〇、一八二一、一八二二、一八二三、一八二四、一八二五、一八二六、一八二七、一八二八、一八二九、一八三〇、一八三一、一八三二、一八三三、一八三四、一八三五、一八三六、一八三七、一八三八、一八三九、一八四〇、一八四一、一八四二、一八四三、一八四四、一八四五、一八四六、一八四七、一八四八、一八四九、一八五〇、一八五一、一八五二、一八五三、一八五四、一八五五、一八五六、一八五七、一八五八、一八五九、一八六〇、一八六一、一八六二、一八六三、一八六四、一八六五、一八六六、一八六七、一八六八、一八六九、一八七〇、一八七一、一八七二、一八七三、一八七四、一八七五、一八七六、一八七七、一八七八、一八七九、一八八〇、一八八一、一八八二、一八八三、一八八四、一八八五、一八八六、一八八七、一八八八、一八八九、一八九〇、一八九一、一八九二、一八九三、一八九四、一八九五、一八九六、一八九七、一八九八、一八九九、一九〇〇、一九〇一、一九〇二、一九〇三、一九〇四、一九〇五、一九〇六、一九〇七、一九〇八、一九〇九、一九一〇、一九一一、一九一二、一九一三、一九一四、一九一五、一九一六、一九一七、一九一八、一九一九、一九二〇、一九二一、一九二二、一九二三、一九二四、一九二五、一九二六、一九二七、一九二八、一九二九、一九三〇、一九三一、一九三二、一九三三、一九三四、一九三五、一九三六、一九三七、一九三八、一九三九、一九四〇、一九四一、一九四二、一九四三、一九四四、一九四五、一九四六、一九四七、一九四八、一九四九、一九五〇、一九五一、一九五二、一九五三、一九五四、一九五五、一九五六、一九五七、一九五八、一九五九、一九六〇、一九六一、一九六二、一九六三、一九六四、一九六五、一九六六、一九六七、一九六八、一九六九、一九七〇、一九七一、一九七二、一九七三、一九七四、一九七五、一九七六、一九七七、一九七八、一九七九、一九八〇、一九八一、一九八二、一九八三、一九八四、一九八五、一九八六、一九八七、一九八八、一九八九、一九九〇、一九九一、一九九二、一九九三、一九九四、一九九五、一九九六、一九九七、一九九八、一九九九、二〇〇〇、二〇〇一、二〇〇二、二〇〇三、二〇〇四、二〇〇五、二〇〇六、二〇〇七、二〇〇八、二〇〇九、二〇一〇、二〇一一、二〇一二、二〇一三、二〇一四、二〇一五、二〇一六、二〇一七、二〇一八、二〇一九、二〇二〇、二〇二一、二〇二二、二〇二三、二〇二四、二〇二五、二〇二六、二〇二七、二〇二八、二〇二九、二〇三〇、二〇三一、二〇三二、二〇三三、二〇三四、二〇三五、二〇三六、二〇三七、二〇三八、二〇三九、二〇四〇、二〇四一、二〇四二、二〇四三、二〇四四、二〇四五、二〇四六、二〇四七、二〇四八、二〇四九、二〇五〇、二〇五一、二〇五二、二〇五三、二〇五四、二〇五五、二〇五六、二〇五七、二〇五八、二〇五九、二〇六〇、二〇六一、二〇六二、二〇六三、二〇六四、二〇六五、二〇六六、二〇六七、二〇六八、二〇六九、二〇七〇、二〇七一、二〇七二、二〇七三、二〇七四、二〇七五、二〇七六、二〇七七、二〇七八、二〇七九、二〇八〇、二〇八一、二〇八二、二〇八三、二〇八四、二〇八五、二〇八六、二〇八七、二〇八八、二〇八九、二〇九〇、二〇九一、二〇九二、二〇九三、二〇九四、二〇九五、二〇九六、二〇九七、二〇九八、二〇九九、二一〇〇、二一〇一、二一〇二、二一〇三、二一〇四、二一〇五、二一〇六、二一〇七、二一〇八、二一〇九、二一一〇、二一一一、二一一二、二一一三、二一一四、二一一五、二一一六、二一一七、二一一八、二一一九、二一二〇、二一二一、二一二二、二一二三、二一二四、二一二五、二一二六、二一二七、二一二八、二一二九、二一三〇、二一三一、二一三二、二一三三、二一三四、二一三五、二一三六、二一三七、二一三八、二一三九、二一四〇、二一四一、二一四二、二一四三、二一四四、二一四五、二一四六、二一四七、二一四八、二一四九、二一五〇、二一五一、二一五二、二一五三、二一五四、二一五五、二一五六、二一五七、二一五八、二一五九、二一六〇、二一六一、二一六二、二一六三、二一六四、二一六五、二一六六、二一六七、二一六八、二一六九、二一七〇、二一七一、二一七二、二一七三、二一七四、二一七五、二一七六、二一七七、二一七八、二一七九、二一八〇、二一八一、二一八二、二一八三、二一八四、二一八五、二一八六、二一八七、二一八八、二一八九、二一九〇、二一九一、二一九二、二一九三、二一九四、二一九五、二一九六、二一九七、二一九八、二一九九、二二〇〇、二二〇一、二二〇二、二二〇三、二二〇四、二二〇五、二二〇六、二二〇七、二二〇八、二二〇九、二二一〇、二二一一、二二一二、二二一三、二二一四、二二一五、二二一六、二二一七、二二一八、二二一九、二二二〇、二二二一、二二二二、二二二三、二二二四、二二二五、二二二六、二二二七、二二二八、二二二九、二二三〇、二二三一、二二三二、二二三三、二二三四、二二三五、二二三六、二二三七、二二三八、二二三九、二二四〇、二二四一、二二四二、二二四三、二二四四、二二四五、二二四六、二二四七、二二四八、二二四九、二二五〇、二二五一、二二五二、二二五三、二二五四、二二五五、二二五六、二二五七、二二五八、二二五九、二二六〇、二二六一、二二六二、二二六三、二二六四、二二六五、二二六六、二二六七、二二六八、二二六九、二二七〇、二二七一、二二七二、二二七三、二二七四、二二七五、二二七六、二二七七、二二七八、二二七九、二二八〇、二二八一、二二八二、二二八三、二二八四、二二八五、二二八六、二二八七、二二八八、二二八九、二二九〇、二二九一、二二九二、二二九三、二二九四、二二九五、二二九六、二二九七、二二九八、二二九九、二三〇〇、二三〇一、二三〇二、二三〇三、二三〇四、二三〇五、二三〇六、二三〇七、二三〇八、二三〇九、二三一〇、二三一一、二三一二、二三一三、二三一四、二三一五、二三一六、二三一七、二三一八、二三一九、二三二〇、二三二一、二三二二、二三二三、二三二四、二三二五、二三二六、二三二七、二三二八、二三二九、二三三〇、二三三一、二三三二、二三三三、二三三四、二三三五、二三三六、二三三七、二三三八、二三三九、二三四〇、二三四一、二三四二、二三四三、二三四四、二三四五、二三四六、二三四七、二三四八、二三四九、二三五〇、二三五一、二三五二、二三五三、二三五四、二三五五、二三五六、二三五七、二三五八、二三五九、二三六〇、二三六一、二三六二、二三六三、二三六四、二三六五、二三六六、二三六七、二三六八、二三六九、二三七〇、二三七一、二三七二、二三七三、二三七四、二三七五、二三七六、二三七七、二三七八、二三七九、二三八〇、二三八一、二三八二、二三八三、二三八四、二三八五、二三八六、二三八七、二三八八、二三八九、二三九〇、二三九一、二三九二、二三九三、二三九四、二三九五、二三九六、二三九七、二三九八、二三九九、二四〇〇、二四〇一、二四〇二、二四〇三、二四〇四、二四〇五、二四〇六、二四〇七、二四〇八、二四〇九、二四一〇、二四一一、二四一二、二四一三、二四一四、二四一五、二四一六、二四一七、二四一八、二四一九、二四二〇、二四二一、二四二二、二四二三、二四二四、二四二五、二四二六、二四二七、二四二八、二四二九、二四三〇、二四三一、二四三二、二四三三、二四三四、二四三五、二四三六、二四三七、二四三八、二四三九、二四四〇、二四四一、二四四二、二四四三、二四四四、二四四五、二四四六、二四四七、二四四八、二四四九、二四五〇、二四五一、二四五二、二四五三、二四五四、二四五五、二四五六、二四五七、二四五八、二四五九、二四六〇、二四六一、二四六二、二四六三、二四六四、二四六五、二四六六、二四六七、二四六八、二四六九、二四七〇、二四七一、二四七二、二四七三、二四七四、二四七五、二四七六、二四七七、二四七八、二四七九、二四八〇、二四八一、二四八二、二四八三、二四八四、二四八五、二四八六、二四八七、二四八八、二四八九、二四九〇、二四九一、二四九二、二四九三、二四九四、二四九五、二四九六、二四九七、二四九八、二四九九、二五〇〇、二五〇一、二五〇二、二五〇三、二五〇四、二五〇五、二五〇六、二五〇七、二五〇八、二五〇九、二五一〇、二五一一、二五一二、二五一三、二五一四、二五一五、二五一六、二五一七、二五一八、二五一九、二五二〇、二五二一、二五二二、二五二三、二五二四、二五二五、二五二六、二五二七、二五二八、二五二九、二五三〇、二五三一、二五三二、二五三三、二五三四、二五三五、二五三六、二五三七、二五三八、二五三九、二五四〇、二五四一、二五四二、二五四三、二五四四、二五四五、二五四六、二五四七、二五四八、二五四九、二五五〇、二五五一、二五五二、二五五三、二五五四、二五五五、二五五六、二五五七、二五五八、二五五九、二五六〇、二五六一、二五六二、二五六三、二五六四、二五六五、二五六六、二五六七、二五六八、二五六九、二五七〇、二五七一、二五七二、二五七三、二五七四、二五七五、二五七六、二五七七、二五七八、二五七九、二五八〇、二五八一、二五八二、二五八三、二五八四、二五八五、二五八六、二五八七、二五八八、二五八九、二五九〇、二五九一、二五九二、二五九三、二五九四、二五九五、二五九六、二五九七、二五九八、二五九九、二六〇〇、二六〇一、二六〇二、二六〇三、二六〇四、二六〇五、二六〇六、二六〇七、二六〇八、二六〇九、二六一〇、二六一一、二六一二、二六一三、二六一四、二六一五、二六一六、二六一七、二六一八、二六一九、二六二〇、二六二一、二六二二、二六二三、二六二四、二六二五、二六二六、二六二七、二六二八、二六二九、二六三〇、二六三一、二六三二、二六三三、二六三四、二六三五、二六三六、二六三七、二六三八、二六三九、二六四〇、二六四一、二六四二、二六四三、二六四四、二六四五、二六四六、二六四七、二六四八、二六四九、二六五〇、二六五一、二六五二、二六五三、二六五四、二六五五、二六五六、二六五七、二六五八、二六五九、二六六〇、二六六一、二六六二、二六六三、二六六四、二六六五、二六六六、二六六七、二六六八、二六六九、二六七〇、二六七一、二六七二、二六七三、二六七四、二六七五、二六七六、二六七七、二六七八、二六七九、二六八〇、二六八一、二六八二、二六八三、二六八四、二六八五、二六八六、二六八七、二六八八、二六八九、二六九〇、二六九一、二六九二、二六九三、二六九四、二六九五、二六九六、二六九七、二六九八、二六九九、二七〇〇、二七〇一、二七〇二、二七〇三、二七〇四、二七〇五、二七〇六、二七〇七、二七〇八、二七〇九、二七一〇、二七一一、二七一二、二七一三、二七一四、二七一五、二七一六、二七一七、二七一八、二七一九、二七二〇、二七二一、二七二二、二七二三、二七二四、二七二五、二七二六、二七二七、二七二八、二七二九、二七三〇、二七三一、二七三二、二七三三、二七三四、二七三五、二七三六、二七三七、二七三八、二七三九、二七四〇、二七四一、二七四二、二七四三、二七四四、二七四五、二七四六、二七四七、二七四八、二七四九、二七五〇、二七五一、二七五二、二七五三、二七五四、二七五五、二七五六、二七五七、二七五八、二七五九、二七六〇、二七六一、二七六二、二七六三、二七六四、二七六五、二七六六、二七六七、二七六八、二七六九、二七七〇、二七七一、二七七二、二七七三、二七七四、二七七五、二七七六、二七七七、二七七八、二七七九、二七八〇、二七八一、二七八二、二七八三、二七八四、二七八五、二七八六、二七八七、二七八八、二七八九、二七九〇、二七九一、二七九二、二七九三、二七九四、二七九五、二七九六、二七九七、二七九八、二七九九、二八〇〇、二八〇一、二八〇二、二八〇三、二八〇四、二八〇五、二八〇六、二八〇七、二八〇八、二八〇九、二八一〇、二八一一、二八一二、二八一三、二八一四、二八一五、二八一六、二八一七、二八一八、二八一九、二八二〇、二八二一、二八二二、二八二三、二八二四、二八二五、二八二六、二八二七、二八二八、二八二九、二八三〇、二八三一、二八三二、二八三三、二八三四、二八三五、二八三六、二八三七、二八三八、二八三九、二八四〇、二八四一、二八四二、二八四三、二八四四、二八四五、二八四六、二八四七、二八四八、二八四九、二八五〇、二八五一、二八五二、二八五三、二八五四、二八五五、二八五六、二八五七、二八五八、二八五九、二八六〇、二八六一、二八六二、二八六三、二八六四、二八六五、二八六六、二八六七、二八六八、二八六九、二八七〇、二八七一、二八七二、二八七三、二八七四、二八七五、二八七六、二八七七、二八七八、二八七九、二八八〇、二八八一、二八八二、二八八三、二八八四、二八八五、二八八六、二八八七、二八八八、二八八九、二八九〇、二八九一、二八九二、二八九三、二八九四、二八九五、二八九六、二八九七、二八九八、二八九九、二九〇〇、二九〇一、二九〇二、二九〇三、二九〇四、二九〇五、二九〇六、二九〇七、二九〇八、二九〇九、二九一〇、二九一一、二九一二、二九一三、二九一四、二九一五、二九一六、二九一七、二九一八、二九一九、二九二〇、二九二一、二九二二、二九二三、二九二四、二九二五、二九二六、二九二七、二九二八、二九二九、二九三〇、二九三一、二九三二、二九三三、二九三四、二九三五、二九三六、二九三七、二九三八、二九三九、二九四〇、二九四一、二九四二、二九四三、二九四四、二九四五、二九四六、二九四七、二九四八、二九四九、二九五〇、二九五一、二九五二、二九五三、二九五四、二九五五、二九五六、二九五七、二九五八、二九五九、二九六〇、二九六一、二九六二、二九六三、二九六四、二九六五、二九六六、二九六七、二九六八、二九六九、二九七〇、二九七一、二九七二、二九七三、二九七四、二九七五、二九七六、二九七七、二九七八、二九七九、二九八〇、二九八一、二九八二、二九八三、二九八四、二九八五、二九八六、二九八七、二九八八、二九八九、二九九〇、二九九一、二九九二、二九九三、二九九四、二九九五、二九九六、二九九七、二九九八、二九九九、三〇〇〇、三〇〇一、三〇〇二、三〇〇三、三〇〇四、三〇〇五、三〇〇六、三〇〇七、三〇〇八、三〇〇九、三〇一〇、三〇一一、三〇一二、三〇一三、三〇一四、三〇一五、三〇一六、三〇一七、三〇一八、三〇一九、三〇二〇、三〇二一、三〇二二、三〇二三、三〇二四、三〇二五、三〇二六、三〇二七、三〇二八、三〇二九、三〇三〇、三〇三一、三〇三二、三〇三三、三〇三四、三〇三五、三〇三六、三〇三七、三〇三八、三〇三九、三〇四〇、三〇四一、三〇四二、三〇四三、三〇四四、三〇四五、三〇四六、三〇四七、三〇四八、三〇四九、三〇五〇、三〇五一、三〇五二、三〇五三、三〇五四、三〇五五、三〇五六、三〇五七、三〇五八、三〇五九、三〇六〇、三〇六一、三〇六二、三〇六三、三〇六四、三〇六五、三〇六六、三〇六七、三〇六八、三〇六九、三〇七〇、三〇七一、三〇七二、三〇七三、三〇七四、三〇七五、三〇七六、三〇七七、三〇七八、三〇七九、三〇八〇、三〇八一、三〇八二、三〇八三、三〇八四、三〇八五、三〇八六、三〇八七、三〇八八、三〇八九、三〇九〇、三〇九一、三〇九二、三〇九三、三〇九四、三〇九五、三〇九六、三〇九七、三〇九八、三〇九九、三一〇〇、三一〇一、三一〇二、三一〇三、三一〇四、三一〇五、三一〇六、三一〇七、三一〇八、三一〇九、三一一〇、三一一一、三一一二、三一一三、三一一四、三一一五、三一一六、三一一七、三一一八、三一一九、三一二〇、三一二一、三一二二、三一二三、三一二四、三一二五、三一二六、三一二七、三一二八、三一二九、三一三〇、三一三一、三一三二、三一三三、三一三四、三一三五、三一三六、三一三七、三一三八、三一三九、三一四〇、三一四一、三一四二、三一四三、三一四四、三一四五、三一四六、三一四七、三一四八、三一四九、三一五〇、三一五一、三一五二、三一五三、三一五四、三一五五、三一五六、三一五七、三一五八、三一五九、三一六〇、三一六一、三一六二、三一六三、三一六四、三一六五、三一六六、三一六七、三一六八、三一六九、三一七〇、三一七一、三一七二、三一七三、三一七四、三一七五、三一七六、三一七七、三一七八、三一七九、三一八〇、三一八一、三一八二、三一八三、三一八四、三一八五、三一八六、三一八七、三一八八、三一八九、三一九〇、三一九一、三一九二、三一九三、三一九四、三一九五、三一九六、三一九七、三一九八、三一九九、三二〇〇、三二〇一、三二〇二、三二〇三、三二〇四、三二〇五、三二〇六、三二〇七、三二〇八、三二〇九、三二一〇、三二一一、三二一二、三二一三、三二一四、三二一五、三二一六、三二一七、三二一八、三二一九、三二二〇、三二二一、三二二二、三二二三、三二二四、三二二五、三二二六、三二二七、三二二八、三二二九、三二三〇、三二三一、三二三二、三二三三、三二三四、三二三五、三二三六、三二三七、三二三八、三二三九、三二四〇、三二四一、三二四二、三二四三、三二四四、三二四五、三二四六、三二四七、三二四八、三二四九、三二五〇、三二五一、三二五二、三二五三、三二五四、三二五五、三二五六、三二五七、三二五八、三二五九、三二六〇、三二六一、三二六二、三二六三、三二六四、三二六五、三二六六、三二六七、三二六八、三二六九、三二七〇、三二七一、三二七二、三二七三、三二七四、三二七

日本文學新史索引終

不許複製

日本文學新史

大正三年十一月十七日印刷
大正三年十一月二十日發行

正價金壹圓三拾錢

著作者　尾上八郎
發行者　伊東芳次郎　東京市牛込區神樂町一丁目一番地
印刷者　平井登　東京市本所區番場町四番地
印刷所　凸版印刷株式會社分工場　東京市本所區番場町四番地

發行所　東京市牛込見付前　東亞堂書房　（電話番町五三七）（振替東京一七一）

文學士 尾上柴舟先生著

近刊

○和歌講話〔豫告〕

全一冊……

起稿中……

文學博士 幸田露伴先生著

近刊

○東洋文藝論〔豫告〕

全一冊……

印刷中……

東京牛込 東亞堂 振替東京一七一

○東亞堂出版圖書特約賣捌店

東京神田 東京堂書店
同神田上誠文堂屋
同神田二勉強堂
同神田崇文堂書店
同神田中西屋書店
同神田有斐閣雜誌店
同本橋至誠堂
同本橋林平次郎堂
同日本橋文林堂
同日本橋柳堂書店
同日本橋目黒書店
同日本橋前川書店
同京橋北隆書店
同京橋東海堂
同京橋春祥堂
同本郷森本書店
同麻布日江分書店
同小石川鶴東聲堂書店

同牛込 東京牛込
同芝 同芝文堂
同芝岸田影館
同横濱市 同第一島屋書店
同第四有隣堂
同第福田書店
同勉強堂
同弘文堂
同第三音集堂
同福田書店
同前田書店
同杉林書店
同若木書店
同東文館
同寶枝書店
同寶文館支店
同小川澤瀬百書支店
同山陽書籍會社
同積善館書店

久留米市 熊本市
鹿兒島市
福岡市
博多市
大分市
長野市
松本市
同岡市
同長崎市
新潟市
金澤市
札幌市
小樽市
秋田市
弘前市
青森市
宇都宮市
朝鮮京城
滿洲大連

菊竹金文堂
長崎書店
谷村書館支店
積善館書店
博愛社
甲斐治平店
四澤書店
水琴堂
明倫堂
鶴林書店
目黒書店
覺張堂書店
萬松堂書店
字都宮書店
富貴堂書店
左文字書店
石川文字書店
今泉書店
今泉集英堂
丙山支店
日韓屋
大阪號

○東亞堂發賣圖書目錄郵券貳錢御送附あれば即時贈呈す

◉誰れが讀みても面白き日本文學傑作全集

日本文藝叢書

文學博士 幸田露伴先生 校訂解題

▲竪五寸、横三寸振かな付 一冊 貳拾錢均一
●特製金彩本、拾錢增（送料一冊四錢。五冊迄八錢）

日本文藝叢書既刊目錄

(1) 馬曲 琴著 椿說弓張月（上）
(2) 文湖 山編 通俗三國志（一）
(3) 馬曲 琴著 椿說弓張月（中）
(4) 十返舍 九著 東海道中膝栗毛（前）
(5) 著者不詳 新訂 太平記（一）
(6) 文湖 山編 通俗三國志（二）
(7) 近松門左衛門作 近松淨瑠璃佳作集（一）
〔心中天網島。博多小女郎浪枕。冥途の飛脚。生玉合戰。曾我會稽山。〕
(8) 馬曲 琴著 椿說弓張月（下）
附錄『昔語賞屋庫』
(9) 著者不詳 新訂 太平記（二）
(10) 十返舍 九著 東海道中膝栗毛（後完）
附錄『金比羅道中膝栗毛』
(11) 文湖 山編 通俗三國志（三）
(12) 井原西鶴 著 西鶴佳作集（一）
日本永代藏。世間胸算用。西鶴置土產。
(13) 著者不詳 新訂 太平記（三）
(14) 馬曲 琴著 開卷驚奇俠客傳（上）
(15) 江島其磧 著 其磧佳作集（全）
商人軍配團。世間子息氣質。其磧諸國物語。
(16) 文湖 山編 通俗三國志（四）
(17) 著者不詳 新訂 太平記（四）
(18) 著者不詳 一休諸國物語（全）
(19) 馬曲 琴著 開卷驚奇俠客傳（中）
(20) 三式 馬著 講談浮世風呂（全）

日本文藝叢書既刊目錄

(21) 文湖 山編 通俗三國志（五）
(22) 馬曲 琴著 開卷驚奇俠客傳（下完）
(23) 三式 馬著 柳髮新話浮世床（全）
(24) 著者不詳 新訂 太平記（五完）
(25) 文湖 山編 通俗三國志（六）
(26) 編者不詳 大岡政談（全）
〔付井長庵。煙草屋喜八。越後傳吉。小間物屋彥兵衛〕
(27) 文湖 山編 通俗三國志（七）
(28) 編者不詳 續大岡政談（全）
天一坊。白木屋お蝶。雲切仁左衛門
(29) 種柳彥 著 邯鄲諸國物語（前）
(30) 種柳彥 著 邯鄲諸國物語（後完）
(31) 鯉瀧 著 花曆八笑人（全）
(32) 文湖 山編 通俗三國志（八）
附錄『支那歷史地圖』
(33) 馬曲 琴著 馬琴佳作集（一）
(34) 爲春 義士水著 いろは文庫（前）
(35) 爲春 義士水著 いろは文庫（後完）
(36) 近松門左衛門著 近松淨瑠璃佳作集（二）
〔孕常盤、鎗の權三重帷衣。大織冠。壽門松。出世景清。丹波與作。〕
(37) 著者不詳 平家物語（前）
(38) 著者不詳 平家物語（後完）
(39) 馬曲 琴編 新訂 水滸傳（一）
(40) 井原西鶴 著 西鶴佳作集（二）
武道傳來記。織留。懷硯。
(41) 紫式部 兼好法師 枕草紙・徒然草（合）
(42) 馬曲 琴著 新訂 水滸傳（二）
(43) 著者不詳 保元物語平治物語（合）
(44) 馬曲 琴編 新訂 水滸傳（三）
(45) 種柳彥 著 偐紫田舍源氏（一）
(46) 種柳彥 著 偐紫田舍源氏（二）
(47) 種柳彥 著 偐紫田舍源氏（三）
(48) 種柳彥 著 偐紫田舍源氏（四完）
(49) 馬曲 琴編 新訂 水滸傳（四）
(50) 秋上田月成 著 雨物語 聽耳猿・痂癖談（合）

文學士 沼波瓊音先生著

徒然草講話

大判函入頗美裝
六百八十頁
正價貳圓八拾錢
送費拾六錢

げに其名の古くして、其生命のとこしへに新たなるは、夫れ兼好法師が徒然草に非ずや。由來古典の貴重すべき物尠なからずと雖も、簡淨の文、曠達の想、此一大哲人の達觀錄の如く、至高至醇の國民性を表現し、趣味豐かに、具證的教訓に富めるは、古今其匹を見ざる所。宜なる哉、留來幾春秋、我が同胞の國民讀本として、家々に誦せられ今將た其甚深の哲理は、オイケン、ベルグソン等新人の新哲學と共鳴する所ありとして、好學なる思想家の間に盛んに推重せられつゝあることや。徒然草は實に吾人をして趣味の眼を開かしめ、眞正なる人生の觀方を敎へ、最高の生活の情味を解せしむべき一大哲學也。著者も實に此講話を草しつゝある間に「始めて確信し得たる全實在なる」一書を公にして、其信仰を確立し得たるなりき。古來徒然の註解多しと雖も、本書の如く、よく字義訓詁の末を超越して、直ちに兼好が肺腑を穿てるものは未だ之有らず。著者の此一大古典の解剖に着手するや、近親に遺言狀を託し、眞に決死の大覺悟を以て此現代語釋を完成す。以て其苦心の尋常ならざるを察すべし。國文研究家中等敎員受驗者諸君は勿論、苟くも志を諸書修養に存せるの士は、必ず此大著を逸せざれ。

本書に對する世評の一斑

《東京朝日新聞批評》國文學に關する書として『徒然草』ほど廣く讀まれたるは少く隨つて此の書ほど註釋書の多きも少かるべし本『徒然草講話』は在來の此等一般註釋書とは大に趣を異にして總べて註釋は之を鼇頭に掲げ本文の次ぎに口語體の譯文を出し次ぎに評の一段を設けたるが此の評こそ恐くは著者の最も得意とする所ならめ冠註も比較的詳細なるのみならず從來の註釋書には佛教其の他の術語等に誤謬多きもの〻みなりしに著者は此の弊を救はんがため頗る努力せし跡歷々として見ゆ加之說明の方法も可成現代的なる新しき解釋を加へ科學哲學等の智識にも訴へたるなど今の學生用として最も適當なるものなることは疑なかるべし。

《國民新聞批評》序文を書いて居る諸學者は一樣に兼好のこの名著を評釋する人としては著者を以て當今最も適當なる人と推賞してゐる著者は近時悟道確信を把握して一大哲理を發明したと傳へられてゐる本書の評の部を見ると何さま或信念の下に新しき見解を發揮して居ることが分かる詰り從來この種の註釋書類は大方その表面の字句の意義にのみ限られた觀があるが本書の著者は之を現代にまで拉し來つて活きた解釋を下し今日の吾等と骨肉に直ちに相觸るゝものたらしめたといふ事は優に本書の價値として舉げて可い其他譯語も上欄に掲げた語釋も又新意を拾ふに足るものがある附錄に兼好法師の傳記及び索引が添へてある。

幸田露伴先生著

好評三版

小說 はるさめ集

大判全一冊
稀有の美本
正價七十五錢
小包料八錢

◉內容 一口劍 三篇。風流佛 十二段。みれん 五章。

本書收むる所の三卷、恐くは之れ明治文學史上特筆牢記すべき稀世の名作たるは世已に定評あり而かも刊本夙に絕えて其得易からざるを憾みとし、乃ち更に先生の嚴密なる校補を經て合刻す。今や參版成る、文壇の缺陷今日よりして癒やされむ。

本書の世評

《讀賣新聞批評》露伴氏の傑作中の傑作と稱せられたる一口劍、風流佛、未練の三篇を合したるもの

《萬朝報批評》今日見るも流石に想華の人を魅するものあるは偉なる哉

《國民新聞批評》殊に文章の精嚴にして崇重なるも而も洒脫にして脂粉の氣を脫せる共に及び易からず著者の出世作として明治文壇の產物として讀んで多大の興味あるべし

《日本人批評》「風流佛」の超脫「一口劍」の莊嚴其藝術家の藝術に對する熱烈なる信念を理想化して描寫殆んど神に迫る

佐藤仁之助先生著
●受驗參考 日本文法解義
正價四拾五錢 送費六錢

佐藤仁之助先生著
●國語漢文 要語詳解 國語の部
正價四拾錢 送費八拾錢

佐藤仁之助先生著
●國語漢文 要語詳解 漢文の部
正價四拾錢 送費八拾錢

佐藤仁之助先生著
●速成應用 漢學捷徑
正價壹圓貳拾錢 送費拾貳錢

佐藤仁之助先生著
●漢字異同辨及用法
正價貳拾錢 送費四拾錢

佐藤仁之助先生著
●假名用法 動詞語尾區別表
正價六錢 送費貳錢

文學士沼波瓊音先生著
●新體書翰文大全
正價壹圓貳拾錢 送費拾貳錢

文學士大町桂月先生著
●作文法講話
正價參拾錢 送費四拾錢

文學士沼波瓊音先生編
●模範名家 俳句大成
正價壹圓貳拾錢 送費拾貳錢

文學士沼波瓊音先生著
●俳句講話
正價四拾錢 送費六拾錢

文學士沼波瓊音先生著
●俳句研究
正價四拾錢 送費六拾錢

文學士沼波瓊音先生著
●俳句階梯
正價參拾錢 送費四拾錢

文學士沼波瓊音先生校訂
●古選新選
正價四拾錢 送費六拾錢

文學士沼波瓊音先生著
●芭蕉句選講話 春の卷
正價六拾錢 送費六拾錢

町田柳塘仙史著
●訂正縮刷 漢詩講話
正價五拾錢 送費六拾錢

志賀雨仙先生著
●和歌作法
正價四拾錢 送費四拾錢

東京牛込 東亞堂 振替東京一七一

348
218

終